
ポケットモンスター～白と黒の想い・外伝～裏切りの黒～

キシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター〜白と黒の想い・外伝〜裏切りの黒〜

【Nコード】

N0479J

【作者名】

キシ

【あらすじ】

本編の3年後の世界。本編の謎だった点。そして、物語は「虹に憧れる者達」に繋がっていく

過去の絆（前書き）

本編「白と黒の想い」の三年後の世界で起きたひと月の事件。その事件が明かす、本編の謎が明らかに

過去の絆

冷たい風が、創生神を仰ぐ。

この3年間。世界は大きく変わった。

いくなれば、過去のこの地のように、人とポケモンが互いに手を取り合って生きていたような世界。

「ダモスよ。……お前の友は、お前との約束を果たそうとしているぞ。」

かつての友に想いを馳せるアルセウス。

「ああ、疲れた。マジここまで徒歩で来ると疲れるわ!!」

ラフな格好で現れた青年。彼の名は、クロノ。

アルセウスの横を陣どり、クロノは持っていたペットボトルの中身を飲みきる。

「……っは。生き返る!」

「……少しはこの風景を楽しんだらどうだ?」

腰をおろし、変わり行く世界を共に見るクロノ。

そして、ここまで持ってきた剣を翳す。

「さて、他の人が来るまでに聞いとこうかな。……お前ら。たまに俺らの事を、『円卓の騎士の長』って言うよな?なんでだ?」

横目でアルセウスを見てクロノは言った。

「……少し長くなるぞ？」

「良いぜ？」

そして、語られるその真意。

「数千年前のミチーナ」

「なぜだ！？ダモス！！」

ミチーナの神殿内で、アルセウスは電撃の嵐を受けていた。

「この、宝玉は返すわけにはいかない。」

「なぜだ！？なぜなのだ！！」

そして、アルセウスの倒れる床が崩れ、そこに流される銀色の水。
その水はすぐに固まり、アルセウスを悲しみと、絶望の中に閉じ込めていく。

「ミチーナの隣国・ルイン」

長い廊下を、白銀の鎧をまとった騎士と、軽装の女剣士が付き従い、女が騎士に何かを話す。

「なに！？ダモスが創生神を裏切っただと！？本当かトリスタン！？」

トリスタンと呼ばれる女剣士。女の隣にはマニユーラがついて歩く。

「はい。誠の事です。私の部下達の報告です。」

顎に手をあて、悩む騎士。

「よし、トリスタン。ガレスとお前。そしてわたしの3人でミチーナに向かう。国王には私から話を通す。ギャロップの用意を。・・・確かダモスの腹心にギシンと言う男がいたはずだ。」

「探りを入れますか？」

「頼む。」

そして、トリスタンは騎士とは別方向に走っていく。

謁見の間の玉座に座る、ルインの国王と王妃。
その前に、片膝をつき、頭を垂れる騎士。

「・・・創生神を裏切るとは。なんと愚かな・・・。良からう、騎士団長アーサーよ、ミチーナへ行き事の真相を探ってまえれ。」

「はっ！この命に変えても！」

立ち上がり、踵を返すアーサー。
謁見の間をで、長い廊下を歩く。

「アーサー。」

「姫。このようなところに何をしに？」

アーサーの手を取る姫。

「また、行ってしまうわけですね。……クロノ。無事で戻ってきてください。」

「……その名は、騎士団長になった時に捨てました。もうその名で、呼ばないでください。」

クロノの胸に、身を任せる姫。

「せめて今だけ……。私を名前で。貴方の本当の名で呼ばせてください……。クロノ。」

「……はい、姫。いえ、アカネ。」

アカネの頭をなでるクロノ。

廊下の曲がり角で、それを見るトリスタン。
唇を強く噛み、その場を後にした。

「騎士団長！ギャロップの用意出来てます！」

城門前で、3馬のギャロップを携える、拳闘士。赤と白を基調とした鎧を纏い、隣にはバシャーモが付き従う。

「すまない、ガレス。……トリスタンは？」

「ここに……。」

アーサーの後ろから、現れるトリスタン。

「揃ったな。では、行くぞ。」

「「はい」」

そして、彼らはミチーナに向け駆けて行った。

「ギシン様。ルインからの使者が2人が謁見に。」

奇抜な髪形の男・ギシンは窓の外から、神殿の外に居る、騎士団長とガレスを見ていた。

「ちつ。仕方だ無い、通せ。」

舌打ちをし、ギシンは客間に足を運んだ。

「うつ！」

首を強打し倒れる兵士。

その後ろには、トリスタンとマニユーラの姿が。

そして、兵の腰から鍵を外し、奥の牢屋に向かう。

牢屋に一人いる男。

うつむき、数日前の出来事を悔やんでいた。

ガチャ

牢のカギが外れる音と共に、牢の扉が開く。

「キミは確か……。」

「お静かに。今、騎士団長がギシンを引きつけています。」

うなづくダモス。そして二人は牢を後にした。

「……以上が事の真相です。」

謁見の間でアーサーとガレス。そして、ギシンが対面し、創生神を裏切った時の事を話していた。

「ふむ。では、ダモスは今、命の宝玉を持ってこの地を逃げたと、

言う事ですか？」

「ええ。我々も、ダモスを全力で探していますが、足取りがつかめず。」

そうギシンが話した瞬間。廊下から聞こえる悲鳴。

そして、力強く開く扉。

そこには、ダモスとトリスタンの姿が。

「さて、これはどう言うことかな、ギシン殿？」

嫌味を込めた笑みを浮かべるアーサー。

ギシンは、その光景にただ言葉を無くすしかなかった。

神殿へ続く廊下を駆けるダモスとアーサー。ダモスの手には、駆けた命の宝玉が。

「急ぐぞダモス！」

「ああ！早くこの宝玉をアルセウスに返さなくては！！！」

そしてたどり着いた、神殿の最下層。

そこには、怒りに満ちたアルセウスが銀色の水によって封じられていた。

「ダモス、ここはお前の出番だ。」

「ああ。超克せよ時空の定めを!!」

胸の前で手を組み、ダモスはそう唱える。
これが、ダモスのみが見える力。
互いの心を分かち合う力。

-ダモス!?-

-アルセウス。私の心を見てください!-

この時、2人の心は分かりあった。

「クロ・・・。アーサー後は頼む。」

「分かった。」

そして、剣を抜き、振り上げるアーサー。

「はあああああ!!」

それを振り下ろし、アルセウスを封じていた銀色の水を一閃する。

碎ける銀色の水。

そこから現れるアルセウス。

「アルセウス、すいません。」

「ダモス。そなたの心しかと見たぞ。・・・ありがとう。」

こうして、アルセウスに命の宝玉は返された。

時は進み、やがて世界に争いの波が押し寄せた。
その波はミチーナをのみ込もうとしていた。

円卓の間で12の騎士達がそろっていた。

「やはり、ミチーナを狙ってくるか……。」

近辺の地図を見てアーサーは深いため息をつく。

「アルセウス達に助力を請いますか？」

「それはダメだ。これは人間が始めた戦いだ。人の手で止めなくてはならない。」

ガラハットの提案を却下するアーサー。しかし、ここに居る誰もがアーサーと同じ事を思っていた。

「……みんな。引くなら今だぞ？おそらくこの戦いは……。」

「おつと団長。それ以上は言いつこなしですぜ？みんな団長を信じてここに居るんだ。……最後までお付き合いしますぜ？」

アレスタンがハルバードを肩で踊らせ、笑いながら話す。
そして、ここに居る全ての者が同じだった。

「馬鹿どもが……。」

そして、全員が自分の武器を取り、戦地に赴いた。

国民も、王も居なくなつた王国・ルイン。

しかし、彼らはこの城を守つた。

再び民が変える場所を守るために。

ルインより離れた高野。

そこに、数千いない円卓の騎士団と、数万を誇る敵国の兵がにらみ合つていた。

彼らは守るために戦つた。自分たちの町を。そしてその先に有る、ミチーナを守るために。

「全軍構え！！・・・この一戦！己の守る者のために！！」

アーサーの指揮を皮切りに、争いが始まつた。

圧倒的な戦力差を前にしても彼らは戦つた。

そして、戦いは終わった。両方が敗北するという形で・・・

動かなくなつたマニユーラを膝に抱き、トリスタンは岩に凭れかかつていた。

「・・・ごめんね。私が弱かつたばかりに・・・。神様・・・。もし、もう一度が有れば、また騎士団長と一緒に・・・い・させ

てね……。」

そして、彼女もまた眠りに着いた。胸に刺さった剣をつたい、彼女の鮮血が流れる。

高野に倒れるガレス。そして、彼に着き従ったバシャーモもまた、主と運命を全うした。

「……神よ。……私にもう一度が有れば……。再び……主と共に有らん事を……。バシャーモよ。その時はお前も一緒だぞ……。。」

天に伸ばした手に力が無くなり、地面に落ちる。

無数の矢が刺さり、アーサーは、そこに倒れていた。

「み、んな……。。」

立ち上がろうとするが、力が入らない。

「アーサー」

「創生神……。。」

彼の前に現れたアルセウス。

「ありがとう……。私たちの……。願いを聞き入れてくれて……。」

「……。今、お前は何を望む？」

「みんなを……。争いの無い時代に。……。幸せの有る時間で転生……。させてやってくれ。」

それが彼の最後の言葉だった。

そして、アルセウスの瞳に涙がこぼれる。

ミチーナには、ルインの民が避難していた。
そして、その客間には、姫がいた。

「クロノ……。!!」

姫の元に運ばれた、クロノが最後まで使っていた剣が運ばれた。
その剣を抱きかかえ、アカネは涙を流した。

「必ず、変えると約束したのに……。!なぜ!」

それから、アカネは何日も泣いた。
そして、彼女が最後に取った事。

「貴方を……。無くしてまで。私は生きていたいとは思いません。
……。今、私も行きます。」

彼の使った剣を胸に当て、それを押し付ける。

「これが、貴公らの前世。我々は前世の貴公らを、争いの無い時代に転生させた。」

アルセウスの口から話された彼らの前世。

「・・・そうか。つまり、ガレス達も昔頃から俺と一緒にだったんだな。」

「そうだ。・・・魂で繋がった絆。それがお前達を再び引き合わせた。」

ガレス達が入っているボールを見るクロノ。
前世の絆が、現代で奇跡を起こした。

「さて、良い事も聞いたし、役者も揃ったし。本題に入りますか。」
立ち上がり振り向くクロノ。

その後ろには、ダイゴ、ワタル、シロナの3人がいた。

「そうだな。では、話し合おうか。」

アルセウスも振り向き、彼らは秘密の話を始めた。

そして、これから1か月。

世界一波乱に満ちた時が待っていた。

第二話 「堕ちたる黒は何を見る」

空を舞うカイリユー。その背中には茜色の髪をなびかせた女性がいる。

彼女の名はアカネ。三年前にロケット団とギンガ団を捕まえたジムリーダー達に協力した人たちの一人だ。

あの事件以来、彼女の生活は変わった。何でも屋は止めていないが、以前ほど危険な仕事はしなくなった。代わりに、荷物を運ぶ、手紙を運ぶ、道中の護衛などの比較的安全な仕事を選ぶようになった。しかし、今回の仕事は少し遠く、ホウエン地方から遠く離れたオーレ地方までの荷物を運ぶ仕事だった。そして帰ってくる途中に聞いたニュースで彼女の表情は変わった。

『二日前、突如として炎上したポケモン協会会長兼ウィールアスコ―ポレーション社長・ケルア・ウィールアスさんの自宅前から中継です。平穏な町だったアルトマーレで突然起こった今回の事件。負傷した使用人たちの意識は今だ戻らず、さらに今だ行方不明のケルア・ウィールアスさん一家。一体だれがこんな事件を起こしたのか。ポケモン協会も事件究明に乗り出し、行方不明の3人の行方を捜索中です。』

そんなニュースをポケギア越しに聞いたアカネ。すぐにクリアスにも連絡を取り、事件現場で合流という事でひとまず連絡を絶った。

「お願いカイリユー。もう少し急いで。」

うなずき、カイリユーは今以上にスピードを上げ、うつすらと見えるアルトマーレに向けて飛ぶ。

焼け落ち、よもや外観など無くなったクロノの家。

周りには『keepout』のテープが張られ、誰も出入りできない状態だった。

「クロノ……。」

今だ安否が分からない想い人の名を言うアカネ。

「アカネさん！」

「クリアス。」

エンペルトにまたがり、水路を駆けるクリアス。

彼もまた、3年前の事件の解決に力を貸した者であり、今は新たに立て直した『ポケモン自然保護協会』の代表取締役の肩書を持っている。

「何でクロノが……」

「分かりません。ですが、ここを襲った連中の狙いはおそらく主だという事だと思います。」

クロノが狙われる理由。

それは、彼にしかない力。『心を変える力』が大きく関わっている。しかし、それだけではなく、クロノ自身が凄腕のトレーナーで有る

事も由来していると、クリアスは考えた。裏付けとしては、現にクロノの両親が行方不明で有る事。つまり、クロノを意のままに操る為に、両親を人質に取った。

現在の情報で最も可能性が高い推測で有った。

「あら？貴方達、アカネさんにクリアスさんですよね？」

アカネ達の後ろから聞こえる声。

振り向く2人。後ろには、現在世界最強と謳われているトレーナーシロナさんが立っていた。

「シロナさん！どうしてここに？」

「私も今回の事件の究明に力を貸しているの。……貴方達もクロノ君が心配なのよね。私に付いてきて。」

シロナに言われるまま、2人が付いて行った先。アルトマーレを離れ、付いた先にはハウエン地方のポケモン協会のハウエン支部だった。

中に案内され、付いた大会議室。

中には、ジョウトのジムリーダーとハウエンのジムリーダー終結していた。

それだけではなく、さらには3人のチャンピオンの姿も。

「シロナさん、おかえりなさい。……クリアス君達も居るみたいですね。」

「ええ。」

ダイゴの問いに淡々と答えるシロナ。

「あの、クロノの足取りなどは分かりましたか？」

「今からその話し合いだ。」

アカネの問いに答えたワタル。

そして暗転する会議室。天井から下がってくる幕に映し出される、プロジェクターの光。

そして映し出される映像。

「これは、今日の早朝に衛星から撮影されたものよ。」

映し出された映像は、槍の柱の最上階。

今でもレックウザが根城にしている場所だ。

そしてそこに現れる一人の人間。レックウザと何かを話している様子が映し出され、そいつはレックウザに向けて、一つのボールを投げる。レックウザも何の抵抗もなくボールの入っていく。

そこで、会議室に光が戻る。

「……この映像が不安で、さっき私は海底遺跡に行ってきた。案の定カイオーガは居ませんでした。」

シロナがそう告げながら、立ち上がる。

「憶測の域を出ませんが、さっきの画像でレックウザと話していた人物はクロノで間違いは無いと思います。そして、クロノ君はウィールアス会長をさらった連中に、脅され彼らの言いなりになっている可能性が有ります。」

そしてさらに続けるシロナ。

「レックウザ、カイオーガと続いている今、クロノ君が次に狙うのはグラードンの可能性が有ります。よって今から我々は、フエン火山に何人か送りクロノ君の救助をします。しかし、グラードン以外にクロノ君が伝説のポケモンを狙う可能性も有ります。よって、クロノ君の救助には私とダイゴ君、ワタルくんの三人のみで行い、残りのメンバーは別名有るまで待機とします。」

「ちょっと待つてください！シロナさん、私たちもクロノの救助に参加させて……」

「ダメよ。」

アカネが全てを言い終わる前にシロナはその提案を却下した。

「貴方達はクロノ君にとってとても大切な人よ。そんな貴方達までも敵の手に堕ちてしまえばクロノ君は今以上に救助が困難になり、今後作戦にも支障をきたすわ。……だから貴方達は、今回の事件が終わるまで、ポケモン協会がその身柄を拘束させてもらいます。」

シロナの言う事はもっともだった。

そして、アカネ達は、作戦に参加できず、客間に通された。

「……もどかしいですね。主を助けられないなんて。」

窓の外をみてそう言うクリアス。

アカネはただ椅子に座り、クロノの安否を祈るしかなかった。

ドアにはロックがしてあり、中からでは開けられない使用のため、アカネ達は自力でこの部屋を出る事すらできなかった。

そんな時だった。

部屋のドアがゆっくり開き、中に誰かが入ってくる。

「あ、アカネさん？」

「しっ！……ほい、荷物。早くクロノンとこってやり。」

2人の荷物を持ってきたジムリーダーのアカネ。

そして、部屋の外で見張りをしていたハヤトは、何も見ていない風を装ってきた。

「ありがとう！」

「ええって。それよりホンマ早く。」

そして、外に向けて走る2人。向かうはフエン火山。

空から見たフエン火山は何時になく静かだった。

「ここに主がいるのでしょうか。」

フエン火山の急な斜面に居る2人。

アカネはしゃがみ地面を見ていた。その先は石の壁がそびえ、その先には進めないが

「……いる。何人かの新しい足跡。この奥に続いてる。」

そして、岩壁を少し横にずらすアカネ。岩壁はいとも簡単に動き、そして、奥に続く道が現れた。

そう、ここはかつてマグマ団がアジトにしていた場所。

中は荒れ放題で、人がいる気配は無かった。

そう、指令室に行くまでは。

指令室への入口の前に居る二人の男。

白衣を改造したような衣装を纏い、入口を守るようにここに立っていた。

「おい、貴様ら。こんなところで何をしている。ここはガキが遊びに来るようなところじゃないぞ?」

一人の男がアカネ達に突っかかるように話しかける。

「ここに、他には誰も居ないの?」

「ああん?なんでお前らなんかに答えなくちゃいけないんだ?」

「そう。ここ奥に居るんだ。」

そして一歩近づくアカネ。

「ちっ!なら力づくで追い出してやるよ!」

そしてボールを出す男たち。

アカネ達もボールからビレッツとエンペルトを出し、これに応戦す

る。

相手はストライクとカイロスの二体。

ビレッジとストライクがつばぜり合いをしている時、カイロスはそんなビレッジを攻撃しようとするが、ビレッジはそれを避け、エンペルトが二体を巻き込み、二体は一瞬にして、戦闘不能になった。

「な、何だこいつら。つえ！」

「さあ！そこをどきなさい！」

アカネが強気な声で男達に言う。

「やはり、お前たち相手じゃ部下達では止められないか。」

部屋の奥から聞こえてくる懐かしい声。

指令室への戸が開き、中から出てきた人物。

少し、髪が伸びて、身長も伸びたが、彼らが捜していた人物。しかし、着てる服は今倒した男たちと同じものだった。

「クロノ……。」

「久しいな、アカネ。」

上着のポケットに手を入れ、彼は昔の友と想い人にそう話した。

第三話 「別れた道・決別の証」

片膝をつく、謎の集団の男達。

「すいません隊長。侵入者を倒せませんでした・・・」

「気にするな。こいつら相手では無理もない。それより、先に導師の元に戻って伝えてくれ。グランドンも我々の計画に賛同してくれた。計画をフェーズ2に移す、と。」

「了解です。」

そして、アカネ達の横を走り去っていく男達。

無言の時間が刻々と過ぎていった。

目の前には探していた人物が・・・。何も言わず、無言で彼らを見ていた。

謎の組織の制服に袖を通して・・・。

「・・・・・・火山の火口で待ってる。そこで話をしよう。」

それだけ言い、クロノはアカネの横を通り過ぎて行った。

アカネもクリアスも、そんなクロノを止める事が出来なかった。

今起きている現実を頭が、心が理解するにはあまりにも、時間がなさすぎた。

重い足取りで、2人はフエン火山の火口まで登った。

3年前。アカネが自分がマグマ団のスパイだった事を明かしたこの場所。

断崖絶壁の崖の先にクロノは立っていた。彼の目の前に広がる、ホウエンの豊かな大地。

彼は、そんな世界を切なそうな眼で見ている。

「……………来たか。」

彼らを見ないで、背中越しにクロノはアカネ達に向かって話かける。

「クロノ！ケルアさんが人質になって仕方なく奴らの言いなりになっているでしょ？それなら、私たちもケルアさんを助けるのに力をかすからさ。」

アカネの声が火口に響く。

「……………俺たちはこの三年間、互いに違う道を歩みながら、世界を見て回った。みんなが笑い合える世界にするために。で、世界はどうなった？今、みんなは笑い合っているか？犯罪は減ったか？」

彼らの間に、一陣の風が舞った。

世界は3年前と何も変わらなかった。

犯罪は減らず、今だ世界は差別に塗れ、法は権力の味方だった。クロノやクリアス。アカネ。3年前のテンガン山の事件にかかわった者達の世界に対する意識こそ変わったが、世界の人の心を変えるまでには、未だ至っていないのが現状だった。

「一朝一夕には人の心は変わりません。ですが、そんな心でも私達

が変えて見せると、言ったのは主であありませんでしたか！一体、この3年間で何が有ったのですか？そして、主はどういった思惑で、その服に袖を通しているのですか！？」

クリアスの声もただ、虚しく響くだけだった。

「……海に何個角砂糖を投げ込めば、甘くなると思う？俺達がやっている事なんて、所詮その程度ことなんだよ。どう足掻いても、海は甘くならない。それが現実だ。」

ようやくクロノが振り返り、アカネ達を見た。
やはりその目は切なさ帯びていた。

「違うよ！確かに、海に何百個の角砂糖を投げて甘くはならないけど、それまでの行為は決して無駄じゃないよ！結果じゃないよ！……クロノ何でそんな考えになっちゃったの？話してよ。」

アカネのその言葉を聞いて、クロノは鼻で笑い下を向く。

「今更かよ……。この3年間、お前達が俺に連絡をよこした時はたいてい、自分の悩みとか愚痴ばっかだったな……。俺がどんなに辛くても苦しくても、お前たちは俺の事を考えてくれた試しがなかったな。そんな奴らが今更、話を聞くだ？笑わせるな！！！」

顔を上げたクロノの眼には、先刻の切なさはなかった。新たに宿つたのは、深い絶望と憎しみだった。

「お前たちは、俺という名前の大樹に寄り添えれば、背中を預ければよかった！ただ、木陰でのうのうと休んでいられた！なら、俺は誰に身を任せればいいんだよ！俺だって人間だ！心が有る！誰かに

支えられたい時だつて有る！お前たちは、この3年間俺を支えてくれた事が有ったか！言ってみろ！！」

クロノに指を指され、口ごもる2人。

この3年間。2人は辛い時など、決まってクロノに連絡を取った。そして、今辛い事などをクロノに話す事で、今まで自分と保つてきた。

しかし、クロノの辛い事、悩みなどを聞いてあげる事をした事は無かった。

反論できなかった。

2人の目が泳ぐ。クロノを直視できなかった。

「……俺はお前たちのために生きてるんじゃない。だから俺は、導師が率いる『シェアリングウィンド』に入った。そして、俺たちの生ぬるいやり方で世界を変えるのではなく、圧倒的な力で世界の秩序を変える！」

「恐怖政治……」

「そうだ！俺たちの今のやり方では、何時までも世界は変わらない！圧倒的な力で悪をねじ伏せる！それこそ、二度と反乱を、ルールを破れないほどの力による圧力をかけてな！」

確たる決意。それゆえにクロノは皆の元を離れた。

世界を思うが故。たとえ道が違えど、クロノは世界を、ポケモン達の事を考えていた。

「クロノが、そんな事を思っていたなんて考えもしなかった……
……。ごめん。でも、クロノのやり方は、私達とは違いすぎる。だ

から、私はクロノを止める！」

腰からボールを取り出すアカネ。

そして、クリアスも同じくボールを取り出す。

「やっぱり、こうなるか。……良いだろ。新しいガレスの力を見て、そして消える。」

そして、クロノはガレスが入ったボールを投げ、ガレスを外に出す。しかし、出てきたガレスは何か違った。そう、何か禍々しいオーラを纏っていた。

「クロノ！そのガレス、もしかして！！」

「そうだ。導師の意に反するが、圧倒的な力を身につけるために、ガレスには『ダークポケモン化』してもらった。」

アカネの問いに、クロノは冷たく答えた。

「ここまで堕ちたましたかクロノ！！」

吠えるクリアスをあざ笑い、クロノは右手の人差し指で2人を挑発する。

そして、2人もビレッジとエンペルトを出す。

「ビレッジ、貴方は隙があればそこを突くように攻撃を！」

「エンペルトはビレッジの援護に徹してください！」

アカネとクリアスの指示に従い、二匹はガレスに攻撃を仕掛けた。

ビレッジのリーフブレードがガレスを襲うが・・・

「ガレス。完膚なきまでにやれ。」

クロノの指示を受け、ようやくガレスが動き出す

ビレッジのリーフブレードを左手で鷲掴みにし防ぎ、エンペルトがそんなガレスを目掛け、ハイドロポンプで攻撃をするが・・・

そんな、エンペルトに向かって、ビレッジを投げつけ、ガレスはハイドロポンプの直撃を交わす。

そして、二匹との距離を急激に詰め、重なっている二匹に強烈な蹴りを入れる。

吹き飛び、地面にたたきつけられる二匹。

そんな二匹の顔面を掴み、持ち上げる。

刹那、ガレスの手首から炎が噴きでる。

「ブラストバーン・・・。」

クロノの指示と共に手首の炎は二匹を襲う。

炎が消えた時、二匹はすでに気を失っていた。

「どうだ。圧倒的な力量差を眼のあたりにして？」

惨劇の前に言葉を無くす二人。

今までのクロノではなかった。戦い方も指示の出し方も。

「さて、このままお前たちにつろちよろされても目障りだ。・・・

二度と俺たちに反抗できないように少し見せしめにさせてもらおう。
・・・ガレス。」

するとガレスは2匹を掴んだまま、火口に向かい歩き出す。

アカネもクリアスも、クロノの意図を読み取り、ビレッジ達をボールに戻そうとボールを構えるが、刹那。
手の中のボールが碎ける。

「え!？」

素早く動く影。正体はトリスタンだった。

クロノがいつの間にか出したトリスタン。そして、この子もまたダークポケモン化していた。

「クロノ! もうバトルは終わったんだよ! ? これ以上は・・・」

「俺はバトルをしていたつもりはないが? 何より、お前たちは俺が一体しか出していないのに、攻撃してきたではないか。その時点で、もうこれはバトルではない。そう『戦争』なんだよ。・・・ガレス、投げろ。」

アカネの言葉を消し、クロノの冷たい指示がガレスの耳に入り、ガレスは火口に2匹を投げ捨てる。

「やめてええええええ!!!!」

アカネの悲鳴はガレスの耳に、クロノの耳に届かず2匹は重力に引き寄せられていく

膝を折り、泣き崩れるアカネ。

無力な自分を悔やみ、拳に力を入れるクリアス。

「分かったか。無力なんだよお前たちは。そんな奴らがどんな事をしたって世界は変わらないんだよ。……最後に決別の証だ。受け取れ。」

そして、クロノは懷から出した、小さなケースをアカネの手元に投げ捨てる。

地面にぶつかり、ケースは開き、中から飛び出すハウエンのジムバツチ。

最後に、決勝戦後に撮った3人とポケモン達の映った写真が飛び出す。

「……これに懲りて、二度と俺の前に現れるな。目障りなんだよ貴様ら……!」

そして、二人の間を通り向けるクロノ。

思い出の写真は彼によって、踏みつけられくしゃくしゃになる。

「この馬鹿弟子がああああああ!!」

「ちっ……! また来たか……!」

上空から聞こえる彼の師の声。

そして、クロノ目掛けて振り下ろされるニョロボンの拳。しかし、クロノはそれをいとも簡単に避ける。

「お久しぶりですシジマ先生。少しお老けになりましたか?」

「貴様！今貴様がした事がどれだけ彼らを、傷つけたか分かっているのか！！」

クロノの質問を無視して話すシジマ。

「分かっているからこんな事をしているんですよ。．．．．その分だと、全員集合か。本当に目障りな連中だ。」

クロノの読みは正しかった。

火口から上昇してくるハヤト。彼のピジョットには先刻、ガレスが投げ捨てたビレッジ達が抱えられたいた。

そして、次々に空から下りてくるジョウトのジムリーダー。

「感動の師弟の再会、という訳ではなさそうだな。．．．．少し分が悪いか。」

「逃がすと思っているのか？貴様には聞きたい事だ山ほどある。それと、彼らの前で一生分謝らければならん！」

そうシジマが話す、クロノには余裕の表情が浮かんでいた。

「確かに、普通的手段では無理ですが、生憎俺には伝説の協力者がいますね。．．．．レックウザ！！」

クロノの叫びと共に、天空から舞い降りるレックウザ。そして吹き荒れる砂埃。

「では、ごきげんよう。．．．二度と合う事が有りませんように。」

そして、クロノと共に消えるレックウザ。

「待てクロノ!!」

シジマの声が空に響く。

クロノが投げつけた思い出のバッジを抱きかかえ、アカネはただ泣いていた。

空を向いて、アカネの隣に立つクリアス。

震えた拳から溢れ出る鮮血。そして、瞳からこぼれる涙。

「・・・・・・・・・・なんでよ・・・・・・・・クロノ・・・・・・・・・・」

小さく漏れるアカネの声。

違った道を歩く者達。

彼らは想った。

『過去に戻りたい』と・・・・・・・・
心の底からそう願った・・・・・・・・

第四話 「過去を見て・今に絶望して」

バンっ！！

壁を叩く音が、ホウエンのポケモン協会の大会議室に響く

「アイツ！！一体に何を考えてるんだ！！！！ふざけんな！！」

怒りを露わにするトウキ。

「落ち着け。彼を知る人全員が、混乱しているんだ。」

「だけだよ！こんなのって有りかよ！！」

トウキを宥めるヤナギ。

全員が困惑していた。

知り合いが。世界のために。誰かのために自分を犠牲にしてきた人が。

今起きている現実では、そんな自分を犠牲にしてまで守った人と対峙し、傷つけている。

分らない。クロノの考えが。

信じられない。今の彼の気持ちが……

「……少し自由行動にしましょう。頭の整理と今後の事も有りますし。」

そう切り出すミカン。

そして、皆は大会議室を出ていく。

「ところで、2人は？」

「部屋で泣いとる。．．．この中で一番辛いのはあの、2人や」

そう話すミカンとアカネ。

フエン火山からここに戻ると、2人はすぐに先刻の客室に案内された。

そして、外まで聞こえる声で、泣いていた．．．．。

「フン．．．！フン．．．！」

中庭で体を動かすシジマ。

体を動かしながら、過去を思い出していた。

クロノと出会った時を．．．

「失礼を承知でお願いします！シジマさん！俺を、自分を弟子にしてください！」

10歳の男の子が、ジムの前でシジマを相手に土下座をしたのが、クロノとシジマの出会いだった。

「．．．．なぜ、俺に弟子入りしたい？」

「強く！誰もが認めるほど強くなりたいからです！！」

強い決意と覚悟を込め、クロノはシジマに話す。しかし、シジマは・

「帰れ。俺は弟子は取らん。それに、人にものを教えられるほど、今の自分に満足していない。」

「なら、俺もここを動きません!!」

「……好きにしろ。」

そして、クロノとシジマの根競べが始まった。クロノの横に居るアチャモも、クロノと覚悟を同じくジムの前に居座った。

それこそ、雨の日も。風の強い日も。クロノはそこを動かうとしなかった。

「……なかなか、根性だけは有るな。」

「貴方。いくらなんでも、10歳の子供相手に酷いのでは?」

「覚悟と根性がなくてはトレーナーなんて勤まらん。」

雨の強い日。窓から雨に打たれるクロノを見るシジマ。

すでに一週間。クロノは飲まず食わずで座る続けていた。

町の人はそんなクロノに、食糧などを渡すが、クロノはそれのことごとくを断り続けた。

そして、二週間の時が立った時。

クロノの前に立つシジマ。

そんなシジマを見上げるクロノ。

「……………この先の崖の上に、風で研磨され丸くなった石がある。それをここに持って来れば、弟子にしてやる。」

「はい！」

シジマが負けた。しかし、タダでは負けなかった。弟子にする代わりに、一つ試練を与えた。

クロノはその、条件を飲んだ。

ふらつく足取りで、クロノは崖に向かい、そして、霞む目で、力の入らない手で、崖を登り始めた。

階段などない。全く人の手が入っていない断崖絶壁の崖。

そんな崖を一步一步上るクロノ。

爪が剥がれ、血が溢れる。

「負けるか……………！俺は……………絶対強くなるんだ！！！」

自分を奮い立たせ、最後の力を振りばるクロノ。

崖を登り切り、言われた石を探す。

しかし、そんなものなどなかった。

「なんで……………」

「そんなもの初めからない。……………そう言えば、貴様が諦めると思い、口から出まかせを言ったただけだ。」

クロノの後から、崖を上ったシジマ。

「……………俺で良いんだな？弟子入りしたならば最後まで、投げ

だすなよ。」

「！・・・はい！！よろしく願います！！」

こうして、クロノはシジマの弟子になれた。

翌朝。朝の5時。

シジマが起きる時間であり、日課の道場でのトレーニングを始める時間だった。

道場に足を運び、シジマは驚いた。

いつもは、自分で磨く道場の床が、すでに磨かれていた。

そして、シジマより早く道場に居るクロノ

「おはようございます。先生。」

胴衣に身を包んだクロノが頭を下げ、朝の挨拶をする。

「これは、お前が？」

「はい。弟子の務めと思ひまして。」

シジマでも、全面を磨くのに1時間弱かかる。

それを、昨日まで、雨風にさらされ、食事も満足にしていないうえに10歳の男が、この床を磨くとなれば3時間前後。

正直、シジマは脱帽だった。

「・・・クロノ。せめて、朝は寝ていていいぞ。いや、師匠の命だ。朝は満身に休め。」

「ですが・・・。分かりました・・・。」

少し納得がいかなかった、クロノは渋々うなずく。

懐かしかった。

あの時のクロノがを思うシジマ。

「何が、貴様を変えた……。クロノよ。」

屋上で、ココアを飲むアカネ。

「あつ。このココア、クロノンが好きだったメーカーやん。」

買った時は気づかなかったが、飲みほした時にようやく気付いた。

「懐かしいなあ。コガネでのクロノンと居た時。」

アカネが、まだジムリーダー候補でコガネジムで研修を受けていた時。

シジマから、連絡を受けた。

『少しの間、弟子の面倒を見て欲しい』と。

「こんにちは。ウチがジムリーダー候補のアカネや。よろしく。えっ

と……」

「……クロノです。では、初めに何をすれば……」

固かった。いや、人と楽しく接する事を知らなかった。

それが、アカネのクロノに対する第一印象だった。

（はあ……。シジマさんもメンドイ奴押し付けて。今度なんかおごらせ）

そう考えるアカネ。シジマから受けたお願い。

それは、

クロノに、人との接し方。ポケモンとの接し方を教えて欲しいということだった。

クロノは確かに、シジマのもとで、ポケモンバトルのイロハを学び、強くなった。おかげで、アチャモだったガレスはワカシャモに進化した。

しかし、クロノはワカシャモと必要以上に接しなかった。

それがシジマには気がかりだった。

だから、シジマはジョウトの全てのジムリーダーにクロノを育てるように依頼した。

「んー。そうやな。なら初めは、ショッピングや！もちろんポケモンと一緒に！」

「え？バトルのコツなんかは……」

「そんなもん24時間考えてたら、バカになってまう！ほら、早くポケモンだし。」

そして、ワカシャモを出すクロノ。アカネはミルタンクを。
そして、クロノの手を引き、コガネ百貨店に入るアカネ。

それからは、何かを買う訳でもないが、服を試着したり、買い食いをする2人と2匹。

初めは、仏頂面だったクロノ。そんな、クロノが初めてアカネの前で笑顔を見せた。

屋上で休憩する2人と2匹。

ポケモン達は、ポケモン専用の広場で遊び、それを見る2人。

「……このココアうまいな。」

そうつぶやいたクロノ。それが初めての笑顔だった。

「その笑顔や。……ただ、強くなるだけなら誰でもできる、けどな、ポケモンと強くなるなら、笑わなアカンよ。もっとワカシャモと遊んでもいいんじゃない？」

そして、立ち上がりワカシャモに近づくクロノ。

そっと頭に手を乗せ、撫でる。

「……お前ってこんなに暖かかったんだな。」

クロノはアカネのところに居る期間。

初めて合った時とは別人のように変わった。人に対しても。ポケモンに対しても。

「なあ、クロノン。……ウチ、今のクロノンの考え分かん。」

ココアのラベルを見てそうつぶやくアカネ。

アカネとクリアスが居る客室の前に立つシロナ。

ドアをノックしようと手を挙げているが、なんと声をかけていいかわからなかった。

「……私も、人として未熟ね。」

そんなシロナの前に、『彼女』が近づく。

「お久しぶりです。シロナさん。」

「ほんと久しぶりね。」

「……2人はこの中に？」

うなづくシロナ。

ベットの上で膝を抱えるアカネ。

手には、クロノが投げつけたバッチケースが握られていた

クリアスは椅子に座り、手を強く握りしめていた。

2人の考えは同じだった。

『自分たちのせいで、クロノを歪めてしまった』

自分達が、少しでもクロノの事を考えていれば、今のような状況になっただけではなかったのでは？

クロノの悩みを聞いていれば、クロノを知る人は、誰も悲しまずにすんだのでは？

そんな、考えが2人の頭の中を駆け巡っていた。

「……ねえ、クリアス。私達、もうクロノの前から居なくなるのか。もう、私達、クロノにとって必要じゃないんだよね？」

「……奇遇ですね。私も似たような事を考えていました。」

クロノに言われた言葉。

『お前達は目障りなんだよ』

辛かった。悲しかった。そして、彼と刻んだ思い出を、信じた人に否定された。

もう、私たちはクロノに必要とされていないんだ。だから、目の前から消えようと考えた。

「随分と簡単に諦めますね。クロノ様は、死ぬ気で貴方達のために頑張ったというのに。」

懐かしい人物の声。

2人は声のする方に、目を向ける。
ドアの前に立つのは、ミヨだった。

あれから、誰にも何も言わずに姿を消して以来音沙汰がなかった。

「ミヨ・・・さん。」

「お久しぶりです。」

涙の跡が残る顔を上げる2人。

そんな、2人に歩み寄るミヨ。

「で、クロノ様の事を諦めるの？・・・所詮貴方達はその程度でしか、クロノ様を考えていなかったって事ですか。それならば、クロノ様の今回の行動も納得せざる負えないですね。」

2人の顔を挑発的な態度で見るミヨ。

反論ができなかった。

そして、ミヨは続けて言う

「反論すら無し、ですか。まったく、貴方達2人にクロノ様の横を預けた私はバカみたいですね。こんな2人を少しでも信じたばかりに・・・。嘆かわしいクロノ様。私が隣に居ればこんな事にはならず・・・。」

「いい加減にして！！私たちがどんな気持ちでここに居るか知らないで！！」

ミヨの言葉にようやく反論したアカネ。

ベットから下り、ミヨを睨みつける。

「ええ！分からないわ！！クロノ様は3年前、どんな時も貴方達2人を心配し、助けようとした！！なのに貴方達はなに！？最後まで

クロノ様を信じることもしなく、世界を敵に回してでもクロノ様を追いかける訳でもなく、ただ泣いて、拳句、クロノ様の前から消える？ふざけないで！！本当にクロノ様を思うなら、クロノ様が貴方達にしたみたいに、最後まで信じてみなさいよ！！」

アカネの胸倉を掴み、怒鳴るミヨ。

その目には、うつすらと涙を浮かべていた。

アカネを突き放し、背中を見せる。

「一生ここで泣いてなさい。・・・私がクロノ様を助ける。そして、貴方達の代わりに私がクロノ様の横に立ち、彼を支えるわ。・・・もし、少しでもクロノ様を思うならば、立ちあがりなさい。そして、前をみて、歩きなさい。」

そして、部屋から出るミヨ。

2人は、それをただ見送るしかできなかった。

部屋から出て、廊下を歩くミヨ。
廊下の壁にもたれかかるシロナ。

「・・・損な役回りを押し付けてごめんなさい。」

「いいんです。あの子たちにはあれくらい言わないと、ダメですから。」

「・・・貴方も辛いんですよ。」

「辛くても泣けません。悲しむのも、喜ぶのも。全部の特権はあの二人に渡しちゃいましたか。」

そんな、ミヨを抱き寄せるシロナ。

「……今は泣いてもいいわよ。私が隠していてあげるから。」

「そんな……事言われると……。抑えられないじゃないですか……。泣かないって……。誓った……。のに……！」

そして、あふれ出すミヨの涙。
声を殺し、泣き崩れる。

「……クロノ君。貴方を思っている人がこんなにも泣いているのよ。」

ハウエンのポケモン協会は、悲しみの色に包まれていた……

暗い廊下を歩くクロノ。

ポケットに手を入れ、向かうは導師の待つ植物園。

植物園。

様々な植物が、ポケモンが自由気ままにここで過ごしていた。

そんな、植物園の真ん中に導師と呼ばれる老人が居た。

ポケモン達に囲まれ、はたから見れば、人畜無害な老人にしか見えなかった。

「導師。只今戻りました。」

「おお、クロノ君おかえりなさい。報告は聞きました。レックウザも協力してくれたそうで。」

「はい。導師の御心を理解してくださりました。」

そう、言った時クロノは頭を押さえ、片膝をつく。

「くっ！・・・また、思考にノイズが・・・！」

「大丈夫ですか？クロノ君。」

「はい。御心配おかけしました。」

「そうですか。今日はもう休んでください。」

「・・・はい。」

そして、クロノは植物園を後にした。

「・・・リーナさん。『彼』の足取りはどうですか？」

「依然、掴めずです。」

「出来るだけ急いでください。あのクロノ君が『本当』の意味でクロノ君になるには、『彼』を消すしか、他に道がありませんから。」

「はい。」

木の後ろから、話していたリーナと呼ばれる人物。
話を終わると、またたく間にその場から気配を消した。

うす暗い廊下を歩くクロノ

「どこに居る・・・！必ず俺が消してやる。俺が『俺』で有る為に。

」

そうつぶやくクロノ。手に込めた力。それは、憎しみに満ちていた。
・・・

第五話 「決意の赤と透明・彷徨う血痕」

砂塵渦巻く荒野。

『彼』は全ての身を隠すほどのロープを纏いその荒野を歩いていた。歩く度に、腰の12の騎士達が収められているボールが擦れ、乾いた音を立てている。

ロープから時折覗く顔。しかし、その顔には、血が付いた包帯が、左目を隠すように巻かれていた。

「見えた……。あれが……。研……。研究所……」

ぼやける『彼』の視界に移る『彼』の目指した目的地。

そして、『彼』は目的地にたどり着く前に倒れてしまう。

その後、彼が研究所の職員に救助されたのは、言うまでもない事だ。

考えた。

自分が何をすべきかを。

向きあった。

自分の信じる心と。

過去を思った。

『彼』が過去に自分達を思ってくれた事を再び見つけた。

だから、彼らは再び立ちあがった。

今必要なのは涙を流し、今を悔やむ事ではない。

涙をこらえ、彼がしてくれた事と同じ事を。同じ心で彼を見る事。もう、この部屋はいらない。

そして、アカネとクリアスは悲しみの殻を砕き、この部屋から抜けだした。

大会議室に再び集うジムリーダー達とチャンピオン3人。そして、ミヨ。

「サテライト映像でレックウザの行方を探知して見たわ。行き先はオーレ地方。そこで、レックウザの反応は消えました。」

シロナがこの場に居る全ての人物にそう告げる。

この話が告げる事。それは、今回の敵の本拠地がオーレ地方にある事を意味していた。

「今後、私達はオーレ地方に足を運び、現地の方々と連携をとり、クロノ君が所属する敵組織『シエアリングウインズ』の討伐を行います。なお今回の作戦は、今この場に居るメンバーのみで行います。理由としては、万が一敵組織が私達が不在の時を狙って、他の地方を狙うかもしれないため、他の地方のジムリーダー達には地方防衛をお願いするためです。」

シロナの話が終わった時、ミヨがシロナに問う。

「シロナさん。一つ質問が……。今回の作戦でクロノ様が敵に回った場合の対応はやはり……。」

聞きたくない答えであった。そして、その問いの答えなど聞かなく

ても分かっていた。

しかし、100%ではない可能性にかけたかった。そしてその答えを人の声で聞きたかった。

「……敵として排除します。可能ならば捕らえて、最高裁にかけます。」

全員の顔色が変わる。やはり答えなど変わらなかった。
クロノは敵。

それは変わらなかった。

「お願いです、少し待ってください!」

ドアを力強く開け、アカネが大会議室に入る。

「クロノの事は、私達に任せてくれませんか!私とクリアスで何とかします。」

シロナの前に立ち、そう訴えるアカネとクリアス。

「フエン火山で、クロノ君は貴方達を切り捨てたのよ?今更、クロノ君が貴方達だけでどうにかなるとは考え難いわ。許可は出来ないわ。」

冷たく切り捨てるシロナ。

個人の感情で平和など守れない。ましてや悪を倒す事など出来ない。

「酷なようだけど、私情で私達は……」

「私情の何が悪いんですか!私たちは、クロノを助けたい!!クロ

ノがしてくれた事を、今度は私たちがする番なんです。お願いします……！」

シロナの言葉をかき消すアカネの想い。

「……シロナさん。クロノ様の事はアカネさん達に任せて見てもいいかもしれません。少なからず、私は今のアカネさんの想いにかけてみたいです。」

ミヨがアカネの想いに同調した。

それをきっかけに、様々な人が賛同していく。

そんな光景をみて、シロナ目を閉じ、アカネとクリアスに告げる。

「……私が危険と判断した場合。問答無用で割って入ります。それまでは貴方達の思うように、クロノ君のために動いてください。」

「はい！！ありがとうございます！」

シロナの判断に礼を言うアカネとクリアス。

「2日後。私たちはオーレ地方に向かいます。それまでに各自用意をしておいてください。」

そして、各々が用意をするため、会議室を後にする。

「……クロノ様の事よろしく願いしますね、お二人様。」

アカネの横を通り過ぎるミヨがそう口にした。

「・・・クロノの横に立ちたいなら、立てば良いじゃん。もちろん『友達』として。『彼女』としての席は渡す気はまだ無いからね。」

後ろ姿のままアカネがミヨに告げる。

そんな二人の顔に笑みが浮かぶ。

互いに励まされ、共に助けたい気持ちを確かめ合った。

確実に近づく、裏切りの真実。

第六話 「目指すは荒野の世界」(前書き)

自分が伏線の張り方がすごく下手なのを痛感しました。
誰か、伏線の張り方教えてください

第六話 「目指すは荒野の世界」

砂吹雪が舞うオーレ地方。

以前は野生のポケモンが生息すらできないほどの、傷ついた大地は時間と人の手によりゆっくりであるが、荒廃する以前の姿に戻りつつあった。

しかし、オーレ地方にも、本土と同じように。世間では公開されていない大きな事件が有った。

『ダークポケモン』

人の手によって心を閉ざされ、兵器として利用されたポケモン達。過去二度、オーレ地方ではダークポケモンを悪用した事件が起きた。しかし、その事ごとくを解決した2人の少年が居た。

一人は、犯罪組織に身を置いていた青年。

もう一人は、純粋な少年。

彼らにより、この事件は解決され、この地方でダークポケモンが作られ、ダークポケモンの事件が起きる事は無かった。

オーレ地方にあるポケモン総合研究所。

この地方にある今現在存在する唯一のポケモン研究施設。それがここだ。

「そうですか。分かりました。では、こちらでもリュウト君とレオ君達を先行して調査させておきます。」

『よろしく願いします、クレイン局長。では、私達もそちらに向かいますのでお願いします。』

TV電話の電源を切るクレイン局長。

部屋の入口近くの壁にもたれかかり、一部始終を見ている銀髪の青年。彼がレオ。そして、一番最初のダークポケモン事件を解決した張本人だ。

「……………また、ダークポケモン絡みの事件か？」

「うん。頼めるかい？レオ君？」

「そのために俺はここに居る。……………俺は先に出るぞ。」

そして、レオは部屋を出ていく。

それに代わり今度は、一人の女性が入ってくる。

「クレイン局長。昨日、保護した青年のメディカルチェックの結果が出ました。……………やっぱり、左目を挟まれた跡がありますね。あと、ポケモン共々疲労がかなり酷いですね。しばらくは目を覚ます事は有りませんね。」

「ああ、すみませんリリアさん。そうですか、彼はまだ目覚めませんか。……………それより彼の顔。どこかで見たような……………？」

リリアと呼ばれる女性にお礼を言うクレイン。そして、顎に手を当て、保護した青年の顔を思い出そうとする。

「まあ、良いでしょう。それより命に別状がなくて安心しました。今はゆっくり休ませてあげましょう。」

「はい。あと、リュウトにはレオ君達とは別に、調査させておきま

す。
」

「お願いします。」

リリアにお礼を言うクレイン。

砂吹雪が舞うオーレ地方。

ようやくの平和を、再び暗雲が立ち込め始めていた……。

オーレ地方行きの船。

発着駅はオーレ地方・アイオポート。

オーレ地方唯一の港町であり、外界と接せる場所だった。

「クロノ……。貴方の心の声を聞きたい。」

甲板でそう願うアカネ。

離れていくハウエン地方を背に、過去のクロノのように信じた人を、最後まで信じてみる決意をした。

追い詰められる『彼』

背には崖。崖の下には川。

挟られた左目。かつて存在していた左目の合った場所より流れる鮮血。

ポケモン達はすでに限界。空に逃げる事も出来ない。

そして、目の前には『彼』と同じ容姿を持つ存在。そして、そいつもまた左目が無く、手には『彼』の血と共に『彼』の左目が握られている。

「さあ、死ね。そして、貴様の座っている席を俺に渡せ。」

「断る。俺には、誰にも譲れない女とダチが居てね。貴様みたいなレプリカ野郎になんか渡せるかつての。」

『彼』のその言葉を聞き、憎しみの色が浮かぶ彼の顔。

「二度と『レプリカ』と呼ぶな！俺は『俺』だ！他の誰でもない！俺だ！さあ、死ね！今すぐ俺と立場を変われ！！」

「・・・・・・御免被る。お前が『俺』なら、分かるだろ。どうしても、この席は譲れねえ事ぐらいな。じゃな、『俺』。」

崖へ目掛け、『彼』は飛んだ。

そして、『彼』の体は谷の底に飲まれていく。

崖に近づき、下を見る『彼』

「・・・・・・俺は、俺で有りたい。次は、必ず消す。」

そして、『彼』は左目を持ち、この場を後にした。

この、一週間後。

『彼』を知る者たちが涙を流す事件の幕が上がった・・・

第七話 「奪う機械・真の意味は所有者の意思で決まる」

轟音が荒野に響く。

ホバー式のバイクにまたがり、サイドカーには彼・レオのパートナー・ミレイを乗せている。

「ちょっと、レオ。なにそんなにイラついてるの？・・・まあ、聞くまでもないか。」

バイクを運転するレオに声を駆けるミレイ。彼の運転が普段より荒い事をすぐに察した。

彼がイラつく原因は、彼と共に行動をしているミレイには手に取るように分かっている。

彼が一番イラつく原因は『ダークポケモン』絡みの事件である。

数年前、彼は腕につけた特別なポケモン捕獲用マシン『スナッチマシン』と悪用していた組織に身を置いていた。

スナッチマシン。

トレーナーのポケモンを奪う事の出来る非道の機械。

彼はそれを使い、様々なトレーナーのポケモンを奪い、それを依頼主に渡していた。

そう、そのポケモン達が『ダークポケモン』になると知って居ながら・・・。

岩部に追い詰められた女の子。

女の子はパートナーのピカチュウを必死に守ろうとし、自分の後ろ

に隠していた。

そんな女の子にゆっくり近づく当時のレオ。
横には彼のポケモンのエーフィとブラッキーが付き従う。

「お願い！ピカチュウだけは！」

涙ぐみ、レオに必死にお願いする名も知らない女の子。

「俺の視界に入ったの運の尽きだ。・・・そのピカチュウ、頂いていくぞ。」

スナッチボール越しに握るモンスターボール。

そして、レオは機械のようにそのボールをピカチュウに向けて投げる・・・。

「チツ・・・。」

過去を思い出し、思わず舌打ちをするレオ。

過去を消せるならば、彼は自分の存在を消したい。

しかし、彼にはそんな生き方しかできなかった。

いや、それしかできなかった。

物心着いた時から、彼は一人だった。

名前も知らない。親の顔も知らない。

彼は自分が生きるために、必死だった。生きるためなら物を盗んだ。泥水すら啜った。

そして、幸せの中に居る人間が憎かった。

そんなレオを拾って育てたのは、彼が組していた『スナッチ団』の

リーダー・ヘルゴンザ。

スナッチ団には、レオと同じような境遇の人間が多く居た。そして、スナッチマシンの雛型を作ったのは、このスナッチ団である。

スナッチマシーンに目をつけ、スナッチマシーン完成に協力する代わりに手足になって働くように話を持ちかけてきたのが、このオーレ地方で様々な事件を起こした組織・シャドーである。

そして、シャドーがダークポケモンを作った組織でもある。

「ちょっと！レオ前、前！！」

「っ！！」

ミレイの大声で我に返り、目の前には巨大な岩が迫ってきていた。

「捕まってる！」

アクセルを一杯に捻るレオ。

巨大な岩の手前でバイクの前部を浮かせ、そのまま、岩を飛び越える。

無事に着地するバイク。そして何事もなかったようにバイクを走らせる。

「もー！ちゃんと前見てよ！……どんなに考えても、過去は変わらないよ？」

「……お前に何が分かる。俺は、本来オーレには居ちゃいけない存在なんだ。」

そして、また無言な時間が始まる。

そんなレオがこのオーレに居る理由。

彼が過去に奪ったポケモン達を持ち主に全て返すためである。

それが終わるまで、彼は罵声を受けても、罵られても、後ろ指を指されても、このオーレに残る覚悟でいた。

今まで、多くのポケモン達を本来の持ち主の手に戻してきた。

しかし、彼の記憶にこびりつく、あの女の子のピカチュウだけが未だ見つからない。

「ひとまず、ヘルゴンザのところに向かう。良いな？」

「うん。」

そして、再びアクセルを吹かすレオ。駆けるの速さは増し、彼らの向かう場所に土煙を上げ向かって行った……

第八話 「二つの黒」 (前書き)

ネタばらしパート！話が少し急展開だった気もしますが・・・

第八話 「二つの黒」

長い船旅を終えた彼ら。

着いた先は発展途上の土地・オーレ地方唯一の港町・アイオポート。港町特有の賑わいと、潮の香りが人の活気へと繋がる。

「観光で来たかったね……。クロノと一緒に。」

「ええ。本当に。」

町の明るい雰囲気を感じアカネが思わず心の内を口に出してしまった。

クリアスもその意見に同意した。いや、現実を忘れたかった。クロノが敵と言う事実を認めたくなかった。しかし、いくら現実を否定しても何も変わらない。

「では、次来る時はクロノ君も一緒に来ましょう。さあ、私たちも未来に向けて歩きましょう。」

2人に対してシロナが言う。今を悔いるより、未来に希望を持つ為に。

その後、彼らが向かった先は、オーレ地方で唯一ポケモンの研究をしている場所。

クレインと呼ばれる人物が局長を務める『ポケモン総合研究所』

建物とその周りの景色は実に綺麗だった。

白塗りの研究所。周りには荒野のオーレ地方とは別世界と思えるほどの緑が生い茂っていた。

近年のオーレ地方は、徐々にではあるが緑が増え始めている。

それに比例して、野生のポケモン達も目撃例が増え、今では他の地方から輸入する数も減り、野生のポケモンを捕まえる形を主流にしている。

「はじめましてクレイン局長。連絡にあずかりましたシンオウ地方のシロナです。」

研究所内に入り、シロナがクレイン局長に挨拶をする。

クレイン局長は細目の長身。目が細いが優しくそうな目をして、メガネをかけた人物である。

「これはご丁寧に。私がこの局長のクレインです。さて、早速ですが。お話に出た『ダークポケモン』についてですが・・・。」

「ええ。これは我々だけではどうしようもない問題ですので。お話は、アカネさんと、クリアスくん。あとワタル君と私の4人で。」

こうして、アカネとクリアス。そしてワタルとシロナさんのみがクレイン局長と話をする事になった。

その間、他のメンバーは研究所内にて待機となった。

アカネ達は、クレイン局長にクロノの事、以前サファリパークにとダークポケモンを見た事を話した。

その話を聞いたクレイン。

優しくそんな顔ではあるが、真剣な雰囲気を出していた

「そうか……。他の地方でもダークポケモンが……。君たちはダークポケモンの気配、みたいな物を感じるのかい？」

クレインの質問にうなづく2人。

「へえ。ミレイ君以外にもそんな人たちが居るんだ。」

「ミレイって誰ですか？」

「ああ。ここでダークポケモンをスナッチ。つまりダークポケモンを捕まえる事ね。それを手伝ってくれている女の子。目つきの悪い男の子と一緒に居るから町なんかで出会ったらすぐにわかるよ。」

笑いながらアカネの質問に答えるクレイン。

「さて、おおその話は分かった。ダークポケモンを悪用しようとしている人間がまだ居るみたいだしね。君たちが来る前にレオ君やリュウト君がもう動いてくれるから、今は報告を待とう。」

「ええ。土地勘のないあたしたちが動いても、捜査には役に立ちませんからね。クレイン局長、この事件解決まで、しばらく御厄介になります。」

クレイン局長に頭を下げるシロナ。
それを了承するクレイン局長。

廃坑の中に足を運ぶレオとミレイ。

しかし、ここには何度も足を運んだ事が有り、足取りはスムーズだった。

何人もの人間とすれ違ったが、誰も彼らを止める者はいなかった。そして、廃坑の一番奥の扉を開ける。

扉の奥には、ひと際体格のかい男が椅子に座っていた。

「よう、レオ。久しいな。まあ、お前がここに来た理由は大凡見当は付いているがな。」

タバコを吹かし、レオに言う大男。彼こそ、ここ『スナッチ団』のボス・ヘルゴンザである。そして、レオの育ての親。

「なら、話は速い。ここ数年、他の地方にダークポケモンが出回っている。心当たりはあるか？」

再びタバコを吹かし、その灰を床に落とすヘルゴンザ。

「シャドーの技術を誰かが持ちだした可能性はある。それに俺たちも調べたが、シャドーはもともと、バツクにいる誰かに操られてた可能性も出てきた。何が言いたいかわかるな。」

煙草を吸い終え、新しい煙草に火をつけるヘルゴンザ

「つまり、シャドーの技術を盗んだのではなく、シャドーに技術力を提供した奴が居るかもしれない、と？」

「ああ。そうになると、大本を叩く以外に手が無い。……
だが、その大本がこのオーレに居るとすれば？」

「勿体つけるな。」

「確かな筋の話だ。信頼性はある。大本は、最近このオーレに戻ってきて何かどえらい事をするみたいだ。中でもその幹部の中に、最近注目されているクロノって奴が居るって話だ。」

「クロノ……。たしかハウエン出身のボンボンだったな。」

「ああ。だがバトルの実力も確かだ。奴らが動き出すのも時間の問題だ。」

刹那。

オーレ地方にけたたましい爆音が響く。

「！！あの方角は！！！」

「レオ、あっちって研究所の方角だよ！！！」

「急ぐぞ！」

そして、レオとミレイはスナッチ団のアジトを急いで後にした

何が起こったか分からなかった。
突然、誰かがここを襲撃した。

「アカネさん、大丈夫ですか？」

アカネを覆うようにかぶさるクリアス。背中には小さいガレキが乗っている。

「う、うん。他のみんなは・・・」

電気の消えた研究所。崩れている壁。

2人は立ち上がり、目の前に彼らが捜していた人物がいた

「！！クロノ！あなたがこれを！！」

クロノがそこには居た。

不敵な笑みを浮かべて・・・

「ああ。楽しいよな。人の悲鳴を聞くのは。ああ・・・何で俺は今まで気づかなかったんだ。自分に正直になって生きる事がこんなに楽しいなんて。」

「これが貴方が望む生き方なの！？みんなを笑顔にするために頑張るって言ってたじゃん！！」

「世界全土が恐怖に跪けば、日常が。生きている事が幸せに感じられるようになるさ。それが俺が選んだ道さ。」

笑みを絶やさないクロノ。心の底から楽しそうにして笑っている。そして、そこに現れるもう一人の人物

「クロノ。無駄話は良い。早く目標を消そう。」

整った顔つきの人物。長い炎のような髪をなびかせ、男とも女とも判別できる

「ああ。分かってるさ。さて、ならターゲットを探しますか。」

2人に背を向けるクロノ。

「行かせません！エンペルト！」

立ち去ろうとするクロノにクリアスはエンペルトを指し向ける。

「愚かな奴。まだ理解出来ていないのか？実力の差を！！ガレス！
！」

振り向くと同時に、クロノはガレスを出し、エンペルトの攻撃を止める。

「ガレス。今回は以前のように手を抜くな。目標を……完全に消せ！」

エンペルトの翼を掴み、硬直するガレス。

クロノの指示を受けた瞬間。ガレスの目つきが変わる。

エンペルトの鋼の翼がガレスの握力で亀裂が入る。

亀裂からは鮮血が流れる。無論ガレスの血ではない。エンペルトのものだ。

「くっ！エンペルト、一旦距離を！」

クリアスの指示を実行したくても、エンペルトはガレスから離れる

事が出来なかった。それほどガレスの握力が強かった。

「距離を取りたいのか？……なら、ご希望通りにしてやるよ！！」

刹那、エンペルトを蹴り飛ばすガレス。

そして、倒れるエンペルトの背中を踏みつけ、彼の羽を掴み軽く力を加える。

有らぬ方向に曲げられるエンペルトの羽

「!!!!!!!!!!!!!!」

悲鳴にならないエンペルトの叫び。

「あつはっはっはっはっ！！！楽しいなクリアス！殺し合いは！！！」

歡喜するクロノ。それに呼応するようにガレスの口角が引きあがる。笑っていた。

「クロノ！貴方と言う人は！！」

後一歩でエンペルトの羽が引きちぎられる瞬間。

ガレキの吹き飛び、爆煙が舞う。

爆煙より現れた、一つの影。

その影がエンペルトの上に居たガレスが吹き飛ばす。

その、影が人の目に映った時、彼らは目を疑った。

エンペルトを守るようにして立つ、バシャーモ。

クロノはそのバシャーモが開けた穴に目を向け叫ぶ

「貴様！！やはり奴はここに居たのか！！」

ガレキで出来た大穴に目を向けるクロノ。

そこから聞こえる足音。

「ご明察の通り。貴様が捜していた人間はここに居る。．．．．．これ以上。俺のダチに手を出させねぞ！！」

アカネとクリアスは絶句した。

その姿を見た時。

大穴から出てきたのは、顔の左半分を包帯で覆われているクロノだったからだ。

「行くぞ、ガレス！」

エンペルトを守るように立つもう一体のガレスに命を出すクロノ。

奇跡とは何か？運命とは何か？

そして、2人のクロノは何なのか？

答えはすぐそこあった．．．

第九話 「クロノVSクロノ」

アカネ達が来る数時間前。

それが、もう一人のクロノが目覚めた時だった。

「っ……。こ、ここは？」

温かい布団の中に居る自分。

そして、顔に異変を感じる。

異変を察するには、数秒と時間を要しなかった。

視界が狭い。顔に痛みを感じる。

左目が……。無い。

左目に手を伸ばし、顔の左半分を包帯が覆われている事に気づく。

そして、先刻から感じる視線。

視線の方に顔を向けると、視線を送る主が居た。

青い髪を、二つのお団子状に纏めてしる女の子がクロノの眠るベツトに顎を載せてこちらを覗いている。

「おはよーお兄ちゃん。元気？」

無垢な笑顔を見せる女の子。

「一応な。それより……」

クロノが何かを言おうとする前に、女の子が口を開いた

「ねえ、お腹減らない？」

そう言われて、クロノは自分が空腹な事に気がつく。そして、空腹を告げる虫が鳴く

「私何か持つてくるね。」

そう言い、女の子はこの場から去っていく。

身を起こし、自分の身体状況を確認するクロノ。

一通りの動きをして見る。

左目の欠落以外は特に問題はなかった。

しかし、急に視界が狭くなると動きがおぼつかない。

「まあ、予想の範囲内か。ガレス達は・・・」

腰のモンスターボールが無い事に気づき、当たりを見渡すクロノ。

11個のボールは全て机の上に並べられていたのを見て、ひとまず安心する。

そしてこの場所が、クロノが目指した場所である事はすぐに理解出来た。

「やあ。目が覚めた見たいだね。ご機嫌はいかがかな？」

クロノが居た部屋に、入ってくる白衣を着た人物。

細い目にメガネをかけた人物。

「おかげさまで。不躰ですいませんが、貴方はクレイン局長とお見受けして良いですか？」

「そうだよ、僕がこの局長、クレインだよ。さて、次は君の名前を教えてくれるかい？」

「クロノ・ウィールアスです。あなた方の力を借りたくてここに来ました。」

クロノが自己紹介をすると、クレインは。

「まあ、まずは君のメディカルチェックをしてからでも遅くはないよ。幸か不幸か、これから来る来客もダークポケモンについてここに強力を必要としている人だしね。」

「分かりました。何から何までしません。」

そして、クロノがここの医療機関にメディカルチェックを受けている時に、『奴ら』が来た。

ガレキの中で対峙する2人のクロノに2匹のガレス。しかし、2人と2匹には明らかに違うものが有った。

その目に宿る光。信念。友への想い。

見た目こそ瓜二つだが、それだけだった。

クリアス達を守るクロノと、敵対するクロノを見比べて、ようやくアカネとクリアスは決定的な違いを見つけられた。

「アカネ、クリアス。大丈夫か？」

背を向けたまま、2人の安否を確認するクロノ。

「本当に・・・クロノなの？」

変わったクロノを前にアカネが目の中のクロノに対してそう口にした。

「『俺は、お前と一緒に居たい』。千年彗星の下で、俺がお前に言
ったセリフだ。」

それだけで、アカネは包帯を巻いたクロノを信じられた。

「『お前は俺のダチだ』。クリアス、シルフカンパニーで俺がお前
に言ったセリフだ。覚えてるか？」

「ええ。あの時は、痛かったですよ。」

ようやくクロノが2人を見た。

そこには居た。2人が信じていたクロノの姿が。彼の笑顔が。彼の
2人を信頼している心からの声が。

「さて。・・・レプリカ野郎。少しおいたが過ぎたな。今回は
容赦しねえ。2人の受けた傷に利子をつけて、さらにそれを倍返し
してやるよ。」

クロノとガレスが構える。

「貴様・・・！また、俺をレプリカと言いやがったな！殺す！俺
は貴様になる！！」

対峙するクロノとガレスも構える。

「何度も言わすな。貴様は俺には成れない。」

まったく同じ構え。

ガレキが落ちた瞬間。

2匹がぶつかり合う。

同じ攻め手。同じ守り手。

相手が上段で攻めたら、それを交わし、足払いをする。が、それを交わし、踵落としを食らわせる。

しかし、そんな攻防を繰り返しながらも互いに、決定打はなかった。
。。。

これほどの攻防を繰り返しながら、2人のクロノの集中力は途切れず、的確な指示を送る。

パートナーのガレス達も、息を切らす事が無かった。

距離を置き、隙を窺う2人と2匹。

「……流石は俺だな。まるで鏡だ。」

「俺は鏡じゃね！俺はお前だ。」

「お前は俺じゃね。いい加減判れ。」

そんな、2人のクロノの戦いを見る、赤毛の男。
シエアリングウィンズの制服に袖を通した人物。

「ふむ……。少し厄介ですね。これを見た2人を消さないと今後

の作戦に支障が出ますね。……では、セオリー通り死んでも
らいますか。」

彼は、ただ信じたクロノを見守る事に集中して、彼の存在を忘れて
いた。

隙だらけだった。

「では、我々の計画の遂行のために死んでくださいね。」

そして、彼のボールから襲いかかるテッカニンの刃。

「リーナ！貴様！！」

咄嗟に気がつくクロノ。しかし、

「貴様の相手は俺だ！！」

クロノのいく先を阻む、クロノ。

アカネも、ポケモンを出そうとするが、

間に合わない！

クロノの脳裏にその言葉が浮かんだ瞬間

「エーフィ！『サイコキネシス』！！」

知らぬ声のと共に、テッカニンの攻撃を食い止めるサイコキネシス。

よろめくテツカニン。

アカネ達の前に現れるエーフィ。敵対するテツカニンに対し、毛を逆立て威嚇する。

「貴方達、怪我はない？」

ガレキの道を渡り、アカネ達に近づくミレイ。

その、後をかけるレオ。彼の横にはブラッキーが付きそつ。

「貴様らか。研究所をガレキの山に変えたのは。」

敵意を向けるレオ。

4対2の圧倒的不利な状況のクロノとシーナ。

「ふむ……。仕方ありませんね。クロノここは一旦退きますよ。」

「チツ。分かった。」

そして、クロノはボーマンダを出しガレスを戻す。

「逃がすかよ！」

そんな2人を追うクロノ。しかし、

「マタドガス！」

シーナの出したマタドガスの煙幕がクロノとガレスの行く手を遮る。

そして、天井を突き破り、2人は研究所から姿を消した。

「逃がすかよ！」

ガレスを戻し、クロノも2人の後を追おうとするが、そんなクロノの手を掴むアカネ

「待つて！クロノ説明して。その目の事とか、全部！」

「……………今は出来ない。ごめん。」

それだけ言い、クロノはアカネの手を振り払い、アレスタンと共に姿を消した。

ガレキと化した研究所。

ようやく出会えた想い人。しかし、彼は何も言わずに姿を消した。

第十話 「話す時」(前書き)

O・T・Y・A・N・I・G・O・S・H・I!!

第十話 「話す時」

廃墟。いや、ここを正確に言い表すならば『荒野』と呼んだ方が近い。

スクラップと化した、ポケモン総合研究所。
幸い、死者は出ていないが、何名かの研究員は大なり小なりの怪我を負っている。

「いやー。彼らもここまでするかなあ。」

頭に手を当て、クレインは他人事のように話す。
彼の横に居るシロナ。

ジムリーダーとアカネ達は、怪我をした人の手当などを手伝っていた。

「さて、シロナさん。そろそろ、全て、教えてくれませんか？・・・
・・・知っているのでしょうか？クロノ君の事とか含めて？」

横目で、シロナを見るクレイン。

「・・・察しがよろしくて。」

「昔から、こういう事に関しては勘が鋭くて・・・シロナさんだけじゃないですね？今回の事を知っているのは？さしずめ、残りのチャンピオン2人当たりかと思うのですが。」

「・・・・・・・・・・もう、隠し通せませんね。」

そして、ジムリーダー達を集めるシロナ。

今の研究所に集まれる場所が無いため、手近な広場に集まった。

「今から、皆さんにお話ししていな事を全て話すわ。」

一呼吸置き、シロナは話始める。

「今回の敵組織『シエアリングウインズ』の存在を知ったのは、クロノ君からの報告を受けてから知りました。今後の対策を講じようと私を含む3人のチャンピオンとクロノ君。そして、アルセウスとテンガン山で話す事になったわ。初めは、この事をジムリーダー全員に話して迅速に処理する案が出たわ。しかし、敵組織は強力は力を持ちながら、小規模の組織。私たちのような巨大な組織では、対処が難しいと結論になったわ。そこで、私たちの取った策。それが・・・」

「クロノを単身敵組織に送りもむ？」

アカネの答えを首を振り否定するシロナ

「少し違うわ。クロノ君を敵の一員にして、内部から崩壊。が、私たちが立てた作戦よ。・・・でも、三週間前、敵組織がこちらの作戦に気づいて、それからクロノ君と連絡が取れなくなったの。そこからは、今までの通りよ。」

話し終えるシロナ。

何人かは、胸をなで下ろしていた。

クロノは敵ではなかった。その事実が分かっただけでも良かった。

反面、敵組織の力の大きさを痛感する者が居る。

「シロナさん。では、伝説のポケモン・レックウザ達は、何で敵組織に加担を？」

クリアスがシロナに質問する。

「敵組織は、ギンガ団達同様に、伝説のポケモンを狙っていたの。クロノ君を敵組織に送ったのは、彼が伝説ポケモンに信頼されていたからよ。そこで、アルセウスを通じて、伝説のポケモン。今回はレックウザ達に協力を仰いで、わざと敵組織に組するようにお願いしたの。そして、時期が来たら、内部のクロノ君とレックウザ達で暴れる。そして、外から私たちが叩く。これが、クロノ君が立てた作戦よ。」

こうして、隠されていた事実を話すシロナ。

「では、なぜクロノは我らの前から消えた？」

シジマが、シロナに言い放つ。

「会長とサクナ夫人が本当に人質になっているからよ。迅速に両親を救いたいと言うのが、今のクロノ君の考えだと思っわ。」

全ての話を聞いてアカネはようやく、全ての不安を拭う事が出来たが・・

「あの、シロナさん。私達を襲ってきた、もう一人のクロノは？」

「もう、一人のクロノ君？」

不思議そうな顔をするシロナ

「はい。お話が遅くなりましたが、私達見たんです。2人のクロノを。フエン火山で私達と戦ったクロノが偽物で、左側の顔を包帯で覆ったもう一人のクロノが、私たちの知るクロノでした。」

「もう一人のクロノか……。厄介だな。」

腕を組み、そう話すシジマ。

「今後、ここでの、情報収集は不可能な状態です。以後は、私たちは自身の足で情報収集を行いたいと思います。」

その、シロナの言葉を聞き、皆は別れて各々が今できる事を始める。

空を舞うクロノとアレスタン。

「見失ったか……。だが、場所は分かってる。あれは、使わせてはない。」

そう、
眩きクロノは、
雲で頂きが隠れている山に向けて飛び立つ

第十一話 「手掛かり」 (前書き)

最近、ネタは浮かんでも、執筆したいという気持ちになれない・・・。
いかなあ・・・。

第十一話 「手掛かり」

地面を走るバイクを空中からカイリユーの背に乗り追いかけるアカネとクリアス。

数時間前。

クレイン局長のポケモン総合研究所が襲撃され、早一日が立っていた。

シロナの指揮するポケモン協会の面々は独自の捜査を始めた。

そこで、アカネとクリアスはクレインに協力しているレオとミレイの2人と情報収集のために行動を開始した。

「レオ。あの2人、どう思う？」

サイドカーに乗るミレイが運転するレオに聞く。

「……実力はあるんだろうが、あのクロノとか言う奴と戦うと全力が出さないみたいだな。そう言った点から見ると、あの二人は今回の作戦には参加しない方がいいと思うが……」

「思うが？」

「……その、クロノと言う奴を思う気持ちだが、どれだけ2人に力を与えるか。それだけでも十分な力を与える。」

「つまり、戦力としては未知数って事？」

頷くレオ。

土煙にまぎれ、ぼんやりと見える目指す町。

パイラタウン。

町、と言うより、集落に近いその町。

町にある家はほとんどが、鉄板をつないだような作り。

町の入口に立つ4人。

「俺から離れるな。この治安はお世辞にも良いとは言にくい。お前達みたいな、奴らが1人で歩いていたら恰好の力モになる。」

脅すようにアカネとクリアスにそう告げるレオ。

それを慌ててミレイが訂正する。

「あ！違う違う！いや、違わないけど。確かに数年前まで、あんまり治安が良くなかった町だけど、最近は大分いいよ？確かに、非法なバトルとかやつてる連中が居るみたいだけど、ギンザルさんが頑張ってるみたいだから、それも大分少なくなっただよ。」

ミレイの必死の弁解。

しかし、アカネが食いついたのは、『ギンザル』と呼ばれる人物だった。

「あの、ミレイさん。ギンザルって誰ですか？」

ミレイの代わりに答えるレオ。

「これから会いに行く男だ。実質この市長のポジションに立つ男

だ。」

そして、歩き出すレオ。

その後についていく3人。

そしてついた4人がついた家。

ここも、他の家と変わらない外観の家だった。

しかし、その家の前には何人もの人が集まっていた。

「レオ。あの人たちって・・・」

「ああ。ONBSのスレッド達だな。」

さらに近づくレオ達。

それに気づいた人の群れ。

「あ！レオさん！大変なんです！」

「どうした？」

慌てふためくスレッドと呼ばれす男。

レオはそれをあしらい、話を進める。

「それが、ギンザルさんが三日前から行方不明なんですよ！最近、少し遠くの山岳地帯で変な格好した連中が居るとかって噂が立って、ギンザルさんがそれを調べに行ったり帰ってこなくて。」

少し考えるレオ。

「・・・そこまでどのくらいの距離だ？」

「人の足だと半日くらいだけど、ギンザルさんはバイクで向かったから、3時間も有ればつくと思うけど・・・」

「分かった。俺が、探してくる。お前たちはここで待ってる。」

そう言い、レオ達は町の入口まで戻る。

「あの、レオさん。あんな事言っていていいんですか？私たちは・・・」

レオの後ろを歩くアカネが言う。

しかし、レオは

「おそらく、ギンザルが向かった山岳地帯がアジトだ。」

「え？」

アカネの疑問を説明するかのようになレオは話を進める。

「ギンザルの向かった山岳地帯は、ポケモンもすみつかない、草木も生えない不毛地帯。確かに貴金属の鉱脈ではあったらしいが、今ではまともな金属も取れない。さらに、金属の採掘のしすぎで地盤はボロボロ。まともに人が歩けないほどにな。しかし、地盤がもろいという事は、簡単に工事がしやすいという事だ。身を隠して、秘密基地の1つや2つを作る事など造作もない。何が言いたいか分かるな？」

つまり、そこが敵のアジトだと言う確率が高い。

「お前たちも、仲間に連絡しておけ。」

そういい、レオはバイクのエンジンを駆ける。

緑が生い茂る庭。

そこに、クロノ達は居た。

「すみません総帥。私のせいで・・・」

頭を垂れるクロノ。

目の前の老人は、笑顔で答える

「いいえ。構いません。しかし、レックウザ達の協力を受けられなくなってしまうのは些か無弁ですね。・・・仕方が有りません。『要塞』を起動しましょう。」

「しかし、『要塞』の起動は、もう少し先のプランのハズです！こんな早期での起動は！」

「致し方ない事です。彼らの力を借りれないのならば、彼らに匹敵する力を見せる必要があるのですから。」

それだけ言い、老人は庭から姿を消した。

第十二話 「託す思い」

空を舞うクロノ。

右目を閉じ、意識を『彼ら』に向ける。

『レックウザ。聞こえているか？』

『今度は本物のようだな。どうした？』

『今の状況の説明は必要か？』

『いや。粗方、創造主から聞いた。ひとまず、カイオーガ、グランドンと共に、奴らの元からは離れた。これからどうする？最終作戦に移るか？』

『いや。奴らの手の中に親父達が居る。それに、俺の事がばれても、もう一つの作戦は生きてる。お前たちはひとまず、シロナさんと合流してくれ。』

『分かった。……クロノ、無茶だけはするな。それと、ラテイオスとエンティが貴様の援軍に向かった。』

『感謝する。』

『ん？……クロノ、奴らのアジトにアカネ達に向かっている。どうする？』

『……レックウザ。アカネ達を回収してくれ。今回の作戦にあいつ等は巻き込みたくない。』

『……それで良いんだな？貴様が決めた事に口をはさむ気はないが、一つ言わせてもらうが……』

『分かってる。だから頼む』

『……分かった』

レックウザとの意識的な会話を終えたクロノ。
そして、クロノが目指した山に到着した……。

土煙を上げ、走るバイク。

乗り手はレオとミレイの2人。

その後方の空をカイリユーの背に乗り飛ぶのはアカネとクリアスの2人。

彼らの目指す山は、うつすらと見える程度だが、着実に近づいている。

しかし、突然の砂嵐が4人を包む。

「敵か!!」

バイクを止め、空を見るレオ。

カイリユーから下りるアカネとクリアス。

「大丈夫。敵じゃないよ。そうでしょう、レックウザ？」

レオと同じく、空を見るアカネがそう言う。
刹那。

『空』と言う空間に罅が入り、空間が割れる。
その中から現れるレックウザ。

「察しがいいな、茜色の髪の姫よ。」

生まれて初めて見る伝説のポケモンを前にするレオ

「これが、伝説のポケモンか……。」

思わず、心にした言葉が漏れる。

「レックウザ。道を開けて。私達クロノのところに向かうの。」

目を閉じて、首を横に振るレックウザ

「そのクロノの頼みだ。貴様達を安全なところに送り届ける。それが我がクロノから頼まれた事だ。」

「そんな……！」

レックウザに頼むアカネ。

「……そのクロノとか言う奴の頼みでここに来た、と言うが。
では何ですぐに俺達を連れて行かない？ 仮にも貴様は伝説のポケモンなんだろ？」

レオがレックウザを指差しそう言う。

無言のレックウザ。

「レックウザ。お前は迷ってるんだろ？クロノの望みをかなえてやりたいが、クロノが心配。違うか？」

レオに指摘され、レックウザはようやく口を開いた。

「……そうだ。我は迷っている。この数年間。クロノは我々ポケモンのために身を粉にして世界を廻った。だからこそ彼を心配する。だが、同時に彼の望みをかなえてやりたい。」

「……レックウザ。貴方の想いを聞かせて。クロノの願いと関係なしに。」

アカネが迷うレックウザに聞く。嘘偽り無い彼の答えを。

「………決まっているだろう。………頼む！クロノを。我らが友人を助けてくれ！」

クロノを助けない
それがレックウザの想いだった

「うん！私たちに任せて！！」

胸をはり、レックウザに答えるアカネ。

「すまない。今の我らには貴殿達に頼るしか出来ない。」

そして、砂嵐が止み、レックウザも空に消える。

「行きましょう。クロノの向かったところに！」

「言われるまでもない。」

再び、バイクに跨りエンジンをかけるレオ。

アカネとクリアスもカイリユーの背に乗り、彼らは再び、目指した先に向かった・・・

第十二話 「託す思い」（後書き）

最近、ふと思った事なんですが、最近のポケモンのタイトルって、某アニメの召喚獣を呼ぶ弾丸に似てますよね。

そこで、そのアニメ風にポケモンのタイトルと言ってみようと思います。

では、どうぞ!!

貴様に相応しいソフトは決まった!!（・ω▼）9 m

高鳴る鼓動の黄金

ハートゴールド!!

荒れ狂う原石

グランドルビー!!

始まりを告げる炎

ファイヤーレッド!!

羽ばたけ! 魔獣!!

ホウオウ!!

テイク2

貴様に相応しいソフトは決まった!!（・ω▼）9 m

魂を揺るがす白銀

ソウルシルバー!!

母なる大海

マリンサファイア！！

原初の新緑

リーフグリーン！！

目覚めよ！魔獣！！
ルギア！！

はい。自己満足です。
では今回はこれで。

第十三話 「起動する悪意」

見渡す限りの荒野。

そんな荒野に佇む巨大な山。

以前人がここで作業をしていた事を意味する、山の内部に続く入口が所々、その口を開いている

「ここに、ギンザルさんが居るのかな？」

「多分な。」

岩山を見上げ、レオとミレイはそう口にした。

彼らの少し後ろをに立つアカネとクリアス。

「ここに、クロノが居るんだよね。」

「ええ。今度は私たちが助けに行きましょう。」

「うん。」

そして、4人は山の中に入ってしまった。

足元のみを照らす明かり。

壁や柱の影に隠れ、クロノは奥に進んでいた。

「……妙だな。警備が手薄すぎる。」

『どう言う事だクロノ？』

クロノの疑問を感じ、ボールの中で待機するエンティが聞く。

『いくら、人目がつきにくい場所に基地を設置したとしても、すでに俺が顕在である事は分かっている事だ。なら、俺が攻め混んでくる事も想定できる事だ。なのにここまで来た間に警備は主要個所のみ。いくらなんでも、警備が手薄すぎる。』

口頭ではなく、念でエンティに話すクロノ。

そう、クロノがここに来る間に見た警備は両手で数えられる程度の人数。

普段の警備より少ない数だった。

まるで、ここが必要無くなったため、偽造のために警備を配置している程度のようにも思えた。

『偽造……。そうか!!』

咄嗟にひらめくクロノ。

『どうしたクロノ？』

『クロノ？』

エンティとラティオスがクロノに問う。

しかし、クロノは今まで隠れながら進んでいたが、もう隠れず道を駆ける。

『今は説明している暇はない！急ぐぞ！！』

廊下の奥に向かって駆ける。

「クソ！！レックウザ達が使えなくなったからって、計画を早めたのか！！」

そう毒づくクロノ。

そんな、クロノに気づく警備の敵。

「邪魔だ貴様ら！！パロミデス、頼む！」

腰からボールを取り出し、パロミデスを出すクロノ。

狭くないが廊下だが、パロミデスほどの大型のポケモンが立つと少し狭く感じる。

そして、クロノの襲撃の幕が開く……

太陽が差し込む中庭。

そこに立つ一人の老人。

そう、この男が今回の事件の主犯・シェアリングウィンズのリーダーであつた

「総帥。クロノがここに襲撃に来ました。いかがいたしますか？」

片膝をつき、リーナがそう話す。

「んゝ。いけませんね。まあ、仕方ありませんね。……いざとなればクロノ君同士『死んで』もらいます。構いませんね？」

不敵な笑みを浮かべる老人。

それに同意するリーナ

「よもや『人形』にはようは無い、と言う事ですか？」

「ええ。役目を終えた役者がステージに立っていると、目障りじゃないですか。ですから、ね？それに、『要塞』はすでに起動し始めています。」

「御意のままに。フォンス総帥。」

そう、話すリーナ。

・ 　そして、彼らのいる山に地鳴りと地震に似た振動が襲いかかる・・・
・

第十四話 「敵の目指すもの」(前書き)

大分遅れましたが、なんとか形にしました。
モチベーションが上がっていないため、あまり良い出来とは言えませんが

第十四話 「敵の目指すもの」

足元のみを照らす電気を頼りに、アカネ達は歩いていった。

「……やはり、ここを誰かが利用しているな。」

前を歩くレオがそう話す。

「確かに。」

半歩後ろを歩くアカネが頷く。

もう、使わなくなり、誰も寄り付かない鉦山に電気は不要。

借りに設置されていたとしても、使わない時は切っているはず。

いや、そもそももよもや使わなくなった鉦山に電気を新しく設置する方がおかしい話であった。

「ここに、敵がいる事が、ますます明確になってきたな……」

そうレオが、口にした瞬間だった。

4人を襲う地震。

「地震!？」

ミレイがしゃがみ、疑問を投げかける。

しかし、この揺れが地震とは違うものである事は4人全員分かっていた。

縦に揺れる鉾山

しかし、縦に揺れるだけではなかった。

通路を駆けるクロノ。

行く手を塞ぐ、敵を全てなぎ倒し、目指すはただ一点。

『クロノ。いい加減教えてくれ。この地震と奴らの計画の関係を』

念でクロノに話すエンティ

そして、クロノは走りながらエンティに語る

「……エンティ。もし、人間社会から、『肉』が無くなったら
どうなると思う。」

『?……タンパク源か。人間の食生活に著しい被害を及ぼす
ほどの影響が有るだろう。今のご時世、食事には必ずと言っていい
ほど、肉食品が有るほどだ。』

エンティの答えは的確だった

「ああ。確かに重大問題だ。だが、決して『必ず』無くてはならな
い物ではない。寧ろ、無くても人は生きていける。過去の世界では、
肉食品を食べなくても人は生きてきた。違うか？」

『確かにそうだ。肉食品が無くても人が生きていく事の問題はない。だが、クロノ。それと奴らの計画との関係はなんだ？』

「今は単なる例だ。……『平和』の定義ってどこにあるか分かるか？いや、そんなものない。人は『今以上の幸せ』を望む生き物だ。だから、『今の平和の基準値を下げる』。初めは人も反発するだろうが、『恐怖政治で人々を黙らせる』事で『今以下の平和を維持する』これが奴らの計画だ。」

『恐怖政治だと！そんな、政治で世界を平和にするつもりなのか！』

驚くエンテイに、クロノは冷静に答えた

「ああ。馬鹿げてる。だがな、奴らはそれで世界が平和になると信じてる。」

そして、クロノが一つの大きな扉を潜る。

その部屋は広く、まるで闘技場のような形状だった。

・ 部屋の対岸には、クロノの向かっている部屋へ通ずる扉があるが・

「動力室に行くにはここを通る必要があるからな。待っていて正解だった。」

部屋を中心に立つ、もう一人のクロノ。

「……………どうあっても、俺と戦うのか？」

「ああ。俺が俺にらるゝ為にな。」

小さいため息をつくクロノ。

そして、首を小さく左右に振り彼に言う

「何度も言わせんな。お前は『俺』になれない。」

「なら、貴様を消して、俺が唯一の『クロノ』になる！！」

そして、彼らはポケモンを出し、ぶつかり合った……………

第十五話 「対面した時」(前書き)

お久です。裏切りの黒の終わりは近いので、スパートをかけます

第十五話 「対面した時」

原因不明の地鳴りがオーレ地方を襲う。

ポケモン総合研究所にいるシロナ達ですら、その地鳴りを感じる事が出来るほどの物であるため、その規模の大きさがもはや、口で説明できるものではない。

「…………そろそろ、動き出す頃とは思っていましたが、それが今だとは…………。クリアス君との連絡は？」

ポケギアで何度もクリアスと連絡を取るハヤト。しかし、先刻の地震の影響なのか、クリアスとの連絡がつかない。
そして、シロナに対し首を横に振るハヤト

「分かりました。では、私たちも震源地に向かいます。」

その時だ。

彼女たちの頭上を覆い尽くす黒い影が空を覆った…………

揺れる船内の機関室
そこに、彼らは居た。

「少し揺れますね。彼らが心配です。ACSを起動してください。」

その老人に指示され、コンソールを叩く彼の部下たちが何かのシステムを起動する

そのシステムが起動すると、船内の揺れはたちまち収まる。

「……彼らが心配です。私は『庭』に居ます。」

「はっ！分かりました。」

そして、老人は機関室を後にした

敵のアジトの内部にケルア達は居た。

無論自由の利かない牢屋の中であるが。

牢屋の中には3人

ケルア、サクナ。そして、ギンザル。

揺れる牢屋の中で、ケルアはただ目を閉じ、時を待っていた
そんな、ケルアを無視してギンザルは牢屋を脱出しようと、鉄格子
を掴み曲げようとしていた。

「そんな事をして、無駄だ。」

「だが、ケルア会長。この揺れは異常だ。早く脱出して外の状況を
確認すべきだ。」

そうギンザルと話すケルア。

「今は時を待つのみ。……いずれ時は動き出す。そうだろ？」

ようやく腰を上げたケルア。

鉄格子を挟み、対峙するのはシェアリングウィンズの下っ端達。しかし全員がシェアリングウィンズの帽子を深々と被っている。

「お迎えにありがとうございました。旦那さま、奥様。」

ケルアは頷き一歩前に出る……

地面に伏せるアカネ達。

「やはり、ここがシェアリングウィンズのアジトか。だが、この揺れは・・・」

伏せるレオがそう、口にする。
その時だ。

彼らの少し先、丁度、Ｔ字炉になっている壁の一角がこの揺れに耐えきれなくなり崩れ始める。

しかし、崩れた壁の先には、自然物ではなく、鉄の扉がその姿をむ

き出しにした。

「レオさん、あそこって・・・」

「その、まさかだ！行くぞ。」

アカネの予想を肯定し、レオは3人に指示を出し、その鉄の扉に向けて駆けだす。

鉄の扉のロックは外れていたため、簡単に内側に入る事が出来た。しかし、驚くべきことは他に有った。

内側は全く揺れていなかった。

「不思議。扉の外はあんなに揺れてるのに・・・」

アカネとミレイの疑問を男性2人が答える。

「おそらく、内側の耐震構造が異常なほど発達してるんだろ。なにせよ、先に進む前にシロナとやりに連絡だ。」

「・・・無理です。さっきから連絡を取っていますが全く繋がりません。」

レオの指示よりも早く、クリアスが行動し、その結果を話す。

この場に留まる事は得策ではないと考えた4人はとりあえず、先に

進んだ。

先に進むにつれ、廊下に真新しい傷が増えていく。
爪の傷跡、焦げ跡、強く踏み込んだために出来たくぼみなどだ。

「これって・・・」

「バトル。いや、争った跡だな。しかもまだ新しい。」

刹那

廊下の先から聞こえてくる爆音。

「行くぞ!!」

レオの声を皮切りにかける4人。

着いた先は、まるで中世のコロシムを思わせるような広い空間。

そこで繰り広げられる2人のクロノと彼らのポケモン達。

しかし、本当のクロノ側には、エンティとラティオスが参戦していた。

「クロノ!!」

アカネの声が、この空間に響く。

「お前ら!!何でここに来た!?!」

目線のみを後方のアカネ達に向ける。

そんな、クロノに対し攻撃の手を止めないもう一人のクロノ

「この俺を相手に、随分と余裕だな!!」

刹那

敵のガレスが、戦っていたガレスを抜き、気を散らしていたクロノに対し襲いかかる。

「クロノ!!」

そんなクロノをかばうエンティ。

エンティのおかげで、助かったクロノ。

「クロノ!! 私たちも戦う!!」

ボールを構えるアカネとクリアス。

しかし、クロノはそれを止める。

「待て!・・・こいつとの決着は俺たちがつける。それより、お前たちは、これを止めてくれ。この先の動力室を叩けば止まる。」

「でも!!」

「頼む。時間が無い・・・。」

それだけ言うクロノ。

ボールを仕舞うアカネ。

「行こうみんな。」

「良いのか？」

そう、話すレオ。

それに頷くアカネ。

「クロノが、私達を頼ってくれた。だから、私はそれに応えたい。」

「そうか……。なら、急ぐぞ！」

「うん！」

そして駆ける4人。

そして、2人のクロノを横切り、動力室へ続く扉をくぐり、その姿を消していく。

「追わなくていいのか？」

眼前のクロノに問うクロノ

「貴様を倒した後、ゆっくりと追う。それだけだ。」

「させねえーよ」

そして、再び、彼らは戦った……

うす暗い廊下を走る4人。

その廊下は長かった。

どれくらいかは分からなかった。

そんな、廊下の奥から、一寸の光が見えた。

近づくにつれ、その光は徐々に大きくなり、やがて彼らは、光のもとにたどり着いた。

「ここが、動力室・・・？」

目の前の光景に、絶句するアカネ。

眼前に広がるのは、美しい庭だった。
その、庭の中を駆ける、ポチエナ達。
とても楽しそうな風景だった

庭の真ん中にある、小さなテーブル。
そこに座る一人の老人。

「どうも、こんにちは。」

老人は立ち上がり、アカネ達を笑顔で迎え入れた。

「貴方は？」

アカネの問いに、同じ笑顔で答える老人。

「これは、申し遅れました。私、この組織『シェアリングウィンズ』

を創設したものです。仲間たちからは『総帥』などと呼ばれていま
す」

老人の、言葉に身構える4人

徐々に終わりに近づく物語。

全てに決着がついた時、皆は何を見るのか？

第十六話 「平和のランク」(前書き)

大変ながらくお待たせしました。

今、人気投票中ですのでどしどしご応募してください

第十六話 「平和のランク」

アカネの眼前に立つ老人。

老人は、自ら口にした。

『私が、シェアリングウィンズのボス』と。

見る感じは、優しそうな老人。

「人はみかけによらないな。で、爺さん。なんでこんな事をする。」

威圧的な態度で話すレオ。

しかし、老人は笑顔のまま答える

「ん〜。・・・お互い、名前を知らないと、呼びにくいですね。
私が何でこんな事をするかをお話する前に、お互いに自己紹介をしましょう。」

小首を傾げ、話す老人。

（何を考えてる？これも何かの計画のうちなのか？）

様々な考えを浮かべるレオ。

「アカネ・ササイです。」

「・・・クリアスです。」

レオの考えを覆すようにアカネとクリアスは目の前の老人に対して、自らの名を名乗った。

そんな2人に対し、老人はようやく自らの名を名乗った。

「ありがとうございます。これでようやく私たちは、お互いを知ることが出来ます。・・おっと、申し遅れました。私の名はフォンス。組織の皆からは『総帥』と呼ばれています。」

穏やかな表情を浮かべ、フォンスは答える。

「・・・フォンスさん。なんでこんな事をするんですか？クロノの偽物を用意したり、こんな物まで作って・・・」

そんな、フォンスへアカネが質問をする。

顎をさするフォンス。

そして、逆にアカネへ質問を返す。

「では、アカネさん、私からも質問です。・・・貴方は、お肉を食べますよね？」

質問の意図が見えない。

しかし、アカネは頷き答える

そして、フォンスの質問は続く

「ですよ。では、今後お肉を食卓から無くす事は出来ますか？」

今度は、首を横に振るアカネ

「そう。では、それはなぜですか？」

「……………もつとも簡単にタンパク源を補給出来るから……？」

フォンスの質問に頭を悩ませ、アカネは自分なりの答えを口にした。

「今回は不正解です。いや、半分正解ですが、私の聞きたい答えではありません。……………なぜ、人がお肉を食卓から消す事が出来ないか。それは、『お肉の旨味を知ってしまった』からです。」

「いい加減にしろ。その事と、貴様の計画と何の関係がある。」

一歩前が出るレオ。

刹那、彼の首筋に一振りの鎌が触る。

ストライクの腕の鎌が、彼の頸筋を捕らえていた。

その、ストライクの後方には、リーナが立っていた。

「総帥のお話中です。お静かに。」

「くっ……………」

そして、フォンスは話を続ける

「お肉の旨さを知ってしまったから、人はお肉を手放せない。つまり、平和と同じ事ですよ。」

「……………平和と言う旨味を知ってしまった。だから、平和を壊すのですか？」

「いえいえ。私は人の未来を心配して今回の事を起こしているんで

すよ？」

「なら、何で人の平和を壊すような事をするんですか！」

笑みを絶やさない、フォンス。

「いえ、平和を壊す訳ではありません。平和のランクを下げるだけです。」

「平和の・・・ランク・・・？」

「ええ。人は今以上の物を欲する生き物です。今以上の平和を求めます。・・・君たちが世界の平和のためにいろいろしてくれていたのは知っています。ですが、それでは争いは消えません。」

一息いれ、フォンスの話が続く

「なら、争いを消すにはどうすべきか。それは、『平和のランクを下げ、人々を弾圧し、全ての怒り、憎しみを背負う対象を作る』事です。そうすれば、人が無意味な争いをすることは無くなる。」

平和のランクを下げ、憎しみの対象を作る。

平和の度合いが下がれば、『今の平和が作り出す』争いの種は消える。

しかし、行き場の亡くなった怒りはどうする？

フォンスはその、行き場の亡くなった怒りをぶつける対象を作る事で、それを解消しようと計画した。

しかし、また別の争いの種が生まれる。

だが、ランクの下がった平和の中で生まれる新たな争いの種。フォ

ンスはそれを、自身が誇示する圧倒的な力で、強引に抑え込む事で防ぐつもりだった。

確かに、この方法ならば、争いは無くなる。しかし、同時に人の自由も無くなる。

「……………そのために、レックウザ達を利用したんですか。クロノの偽物を使って…………！」

「はい。レックウザ達を信用させるためには、クロノ君を使う事が一番手っ取り早い事だったので。」

「貴方は……！」

怒りをあらわにするクリアス。

刹那。

外壁が爆煙を上げ、崩れ落ちる。

巻きあがる爆煙がこの、部屋を包む。

煙の中から出てきたのは、2匹のバシャーモと2人のクロノ。

「おやおや。ここまで、クロノ君の侵入を許すとは……。本当に出来の悪い人形ですね。」

誰にも聞こえない声で、クロノに言うフォンス。

「フォンス……！」

フォンスを睨みつけるクロノ。

二つの黒が出会い、一つの狂った意思が表れた時。
長かった1か月の物語に終止符が打たれる・・・

第十七話 「古傷」

爆煙と共に現れた2人のクロノ
しかし、アカネ達の知る『本当』のクロノは、フォンスを睨みつけていた

「おやおや、クロノ君。お久しぶり・・・でよろしいですか？」

「貴様・・・！」

対峙しているもう一人のクロノを無視して、フォンスに飛びかかる
うとするが、クロノはすぐに今現在の状況を把握した。

アカネ達と一緒に来ている男・レオの首にはレーナのストライクの
鎌が。

迂闊には動けなかった。

「流石は、世界が注目するトレーナーだ。良い状況判断だ。」

不敵な笑みを浮かべすレーナ。
しかし・・・

突然、ストライクの姿が消えた
否、ボールに吸いこまれたのだった。

「しまった！？」

すぐに状況を判断するレーナ。
そして、身動きの取れなかった、レオはすぐにレーナと距離を置い

た。

「俺が、何も装備していなければ、積んでいただろうが。生憎と俺には、スナッチマシーンをつけていてね。」

左腕に装備されているスナッチマシーンを見せるレオ。

「……なるほど。ダークポケモンでもない私のストライクをスナッチしたカラクリ。貴方、今スナッチマシンのプロテクト・・外しましたね？」

無言のレオ

本来のスナッチマシンは、ダークポケモンを捕まえるための道具ではない。

しかし、レオが持ち込んだスナッチマシーンには、独自の改良がされていた。

それは、『ダークポケモン以外に対してはスナッチマシーンが作動しない』ようにするプロテクトだった。

今では、オーレ地方で様々な事件を解決してきているが、彼の素性を知る者としては、彼にスナッチマシーンを持たせること自体を危惧している。

ゆえに、施された処置だった。

しかし、今のレオにはプロテクトを外す事は拷問でしかなかった

胃が逆流しそうになる・・・

自然と右手が腹部に行く

「ああ……。そうでしたね。今のあなたには、プロテクトを外す事は拷問でしたね。」

「……。黙れ。」

「そう、最後にスナッチした、あの女の子のピカチュウをスナッチし時を思いだして、自分が嫌になるんですよね？」

「黙れと言っている!!!!!!」

エーフィとブラッキーを出し、リーナに向け駆けるレオ

しかし、そんなリーナは一匹のポケモンを出す。

その、ポケモン見たレオは、足を止める。

相手は一匹。

ダークポケモンである事以外は、何の変哲もないポケモンだった

そう、何の変哲もないピカチュウだった……

「そのピカチュウは……。まさか……」

「ええ。貴方が、あの女の子からスナッチしたピカチュウです。どうですか？古傷を抉られる感じは？」

リーナの挑発

しかし、今のレオにはそんな挑発をまともに聞き入れる余裕はなか

った

どれほど後悔してもし足りないほどの、罪を自分は犯した。

両膝をつくレオ。

「戦えない……俺には、あのピカチュウと戦えない……」

無防備のフォンスに向けて駆ける、クロノとガレス。

「フォンス！貴様は今ここで止める！！」

しかし、そんなクロノの行く手を塞ぐ、もう一人のクロノとガレス

「邪魔だどけ！！」

「貴様を倒して、俺は！俺たちは本当の意味で『クロノ』になるんだ！！」

「何度も言わせるな！！貴様は『俺』にはなれない！！」

そして、再びぶつかり合う2人

そんな、戦いを見るフォンス。

「いやあ、実に醜いですね。やはり、早く計画を最終段階にすべきですね。」

「させないよ。」

フォンスの横から近づいたアカネが、そう話す

「貴方の言っている事も理解できる。でも、それでも私たちは私たちのやり方を曲げない。」

「解せませんね。そのやり方では、真の平和への道は果てしなく遠いというのに。」

刹那、フォンスを中心に大きな状に床上空に伸びていく。

「アカネさん。少し、落ち着いてお話をしましょう。」

そして、床は天井のさらに奥へと消えていった……

第十八話 「平和への価値観・平和へ託した思い」

小さな振動と共にせりあがって行く床。

その面積の中には、アカネとフォンスのみが居る。

床はようやく止まり、そこは屋外だった。

しかし、全面ガラス張りの空間だった。

そこに広がる世界。

見渡す限りの青い空。

下には広がるオーレ地方の大地。

目の前に広がる大地の大半は荒野だが、少しずつ広がっていく新緑。

そして、小さな町々。

無論人の姿は目視出来ない。

そして、天高く聳えるランガルタワー。

数年前に『ダークポケモン』を悪用した組織が立てたタワーであるが、今ではポケモントレーナーが腕を磨くレジャー施設になっている。

空高くからオーレの大地を見たアカネ。

純粹に美しいと思っていた。

「どうです？アカネさん。このオーレ地方を見て。」

アカネの前に立つフォンスがそう、問いかける。

「……大地の、人とポケモン達の息づく平和が見えます。でも、決して大地を汚していない。荒れた大地だからこそ、人とポ

ケモンが一丸となって今を生き抜いている様子が私には見えます。」

手を叩き、アカネの答えを褒めるフォンス。

「実に美しい答えです。そう、このオーレ地方は他の地方とは比べ物にならないほど、技術力は劣り、生活水準も低いです。だからこそ、人もポケモンも一丸となって『今という平和』を精一杯生きています。しかし、ここ以外の地方はどうですか？高すぎる技術力。高すぎる生活水準。そこに住む人の心があまりにも豊かすぎる。それゆえにそこに住む人たちは、今以上の平和を求める。そして、どんな事になっているかは、アカネさんも御存じですね？」

笑みを絶やさなかったフォンスが初めて怒りをあらわにした表情を浮かべる。

オーレ以外で起きているポケモン関係の事件。
人の道を外れた行い。

「・・・・・・ポケモンの遺伝子改造・・・・」

アカネも口にしたくなかった言葉。

ポケモンの遺伝子改造。

人の道を外れた行い・外道の道

もっと簡単な例えで言おう。

ゲームのポケモンで言うと、データの書き換えである。

本来覚えるはずの無い技を強引に覚えさせる

ポケモンの卵の孵化するタイミングを任意的に調整する。

ポケモン個体の限界以上の能力を強引に引き出す事

数えればきりが無いほどの外道の道。
命をもてあそぶ外道の技術

「人の飽くなき探求心によつて研究材料となつた命！不本意で生まれた命！人が悪いのか！人の待つ探求欲が悪いのか！！求める心が悪いのか！！そんな哀れな命が生まれない世の中にすべきです！！では、どうするべきなのか！ならば、人の探究心を奪えばいい！探求するだけの平和的ゆとりを消し去ればいい！！」

アカネに背を向け、ガラスの外の向こうの世界に向けて語るように怒鳴るフォンス

「・・・そのために、今の世界の平和を壊すのですか？」

「ええ！出来る事ならば、この世界の『悪人』全てを消し去りたい！しかし、そんな事は夢物語！ならば、そんな外道が生まれない世の中にすれば良いのです！貴方も、クリアス君みたいな方が生まれない世の中にしたいと思いませんか？」

「クリアスみたいな命を生み出したくないのは私も同じです。ですが、貴方の行いは。あのクロノの偽物は！貴方の言う、外道の道ではないのですか！！」

「偽善で平和は生み出せません！！たとえ、悪魔に魂を売り渡してでも！その命に恨まれても、貫かなければならない信念があります！！それに、あのクロノ君は長い事持ちませんよ。そう言う風に作りましたから。」

「作った・・・！この外道！貴方は自己矛盾してます！！貴方の掲げる平和のために貴方は、哀れな命を作って、その命を道具のように扱っています！！私は貴方の全てを否定します！貴方の掲げ平和を拒絶します！！」

フォンスの背中に指向けるアカネ。

そして、アカネに向き直るフォンス

「・・・・・・・・クロノ君と同じ事を言いますね。では、最後に、クロノ君に言った事を貴方にも言います。私と一緒に真の平和のために力を貸してください。」

アカネは即答で答えた。

いや、アカネの言葉を、彼女のパートナーが代弁した

フォンスの背中から、切りかかるビレッジ

しかし、それを止めるドンガラス

「これが答えです。さっき私が言った言葉をもう一度言います。・・・外道！！私は貴方の全てを、掲げる平和を否定し拒絶します！！！！」

目を閉じ、一呼吸入れるフォンス。

「・・・・・・・・やはり同じですか。似た者ですね。では、クロノ君同様に・・・・・・・・消えてください。」

そして、杖を一度地面に打ち付ける

すると、別の昇降機から、無数の団員達がアカネを取り囲む。そして、団員達はポケモンを出し、臨戦態勢をとる。

「殺さないください。ケルアさん同様に捉えてください。あわよくば、本物のクロノ君が結う事を聞いてくれるはずですから。」

しかし、フォンスの命令を誰も復唱はしなかった。

「いけませんね。少女一人を相手に、大の大人が数人で襲うなど本当の悪党じゃないですか。」

聞きなれた声が、この空間に響く。

「へ・・・・・・・・？」

刹那

団員達全てが、アカネではなくフォンスを囲む。

そして、一人の団員がアカネの近くにより、守るように前に立つ。

「セバス・・・・・・・・さん？」

「はい。お久しゅうございますアカネさん。」

帽子を取り、一礼するセバス。

そして、全ての団員達が帽子を脱ぎ棄てる。

その素顔は、アカネもうつすらと覚えていた。

全員、クロノの家に仕えていた執事やメイド達だった。

しかし、フォンスは顔色一つ変えなかった

「……あまり驚かないんですね。」

「ええ。ここまでは大凡想定していましたから。さて、四方を囲まれていしまいましたね。どうしましうかねえ？」

とぼけた口調で話すフォンス。

「貴方を押さえれば、今回の事件は終わります。投降していただけますか？」

「断ります。リーナさんお願いします。」

「御意!!」

突然、フォンスの前に現れるリーナ。

そして、マタドガスを出し、全員の視界を奪う。

「なっ！彼は今、下で戦っているはずでは!？」

焦るセバスをしり目に、フォンスとリーナはこの場から姿を消した

「セバス執事長、追いますか？」

「はい。何名かは彼らの事を追ってください。」

「了解です！」

そして、何名かの執事が昇降機に乗り、フォンス達が向かいそうな場所に向かった。

「セバスさん！クロノ達は！？」

「我々がなんとかします。アカネさんは彼らと一緒にここからの脱出してください。」

胸に手を当て、考える

そして、一つの答えを出した

「ごめんなさいセバスさん！私クロノのところに戻ります！今まで一人だったクロノの力になりたいんです！！」

そして、ブレッジ共に新たに出したカイリユーが開けた穴に向かって飛び降りた

「……致し方ありません。みなさん、我々はこの飛行要塞を全力で止めます。誰も死なせず、確実に！！」

セバスの号令に呼応しメイドと執事達が答える

第十九話 「込めたる想い」

カイリユーに跨り、来た道を降下するアカネとパートナーのビレッジ。

先刻、前々から潜入していたセバス達に助けられて、セバスにここからの脱出を進められたが、彼女はそれを拒み、今に至る。

下に近づくにつれて、戦う音が聞こえてくる。

少しだが巻きあがってくる土煙

雷の光

炎の花

様々な戦いの光が見えてくる

たった一体のピカチュウ相手に苦戦するエーフィとブラッキー。

様々な戦線を潜り向けてきた彼ら。

そして彼らが信じ得てきたマスター。

腕には。自身の実力には自信が有った。

しかし、今はその実力は100パーセント出せなかった。

信じていたマスターの戦意が全てそがれたからだ。
今、2匹が出来る事はただ回避に専念するしかなかった。

「ふふふ……。名だたる悪党が貴方の名を聞けば恐れ慄くのに、
今ではたった一匹のピカチュウごときに苦戦どころか、戦う事を止
めてしまうとは。」

嫌みな笑みを浮かべ笑うリーナ。

立位を保っているが、立っているのがやっとの状態のレオ。

「……。きさ……。ま……。!！」

睨みつけるレオ。

「さて。そろそろ、終わらせてもらいましょうか。ピカチュウ、
ボルテッカー」。無論フルパワーで。」

命令に従い、距離を取るピカチュウ。

そして、爆発的な電力をその小さな体に集め出す。

しかし、その電力はあまりにも大きすぎた。

それこそ、ピカチュウ自信の体が持たないほどに……

「貴様！そんな事をしたら、ピカチュウが!！」

「ええ。おそらく最悪のシナリオで終わると思いますよ。ですが、
そんな事関係無いです。そう、昔の貴方みたいに、全く関係ない人
からポケモンを奪ったように。ポケモンを道具のよう扱った貴方の
ように私も使い捨てのように使わせてもらっているだけです。」

言葉を無くすレオ。

かつて、自分も命令に従いただ、何も考えずに人のポケモンを奪ってきた。

そんな、自分が今更ポケモンの心配など……

「違う!!」

そんな自分を叱咤したような声が響く

「今のレオは、昔とは違う! 昔を悔やんで! 後悔して! だから必死にみんなのポケモンを集めて回ってる!! 罪は消せないけど、みんなの謝る事は出来る!!」

ミレイがそう話す。

彼女と出会ってからレオも変わった。

「何をいまさら。悪党は所詮悪党。何をしても償えないものですよ」
やれやれ、といった様子で手を肩の上程まで上げる

「……確かに、俺は今で償えないほどの事をしてきた。だからこそ、俺は今もスナッチしてきた。」

エーフィとブラッキーを仕舞うレオ。

そして、代わりにスナッチマシン越しに一つのモンスターボールを握る

「そして！そのピカチュウが俺の最後の被害者だ！！」

「戯言を！！ピカチュウ！ボルテッカー！！」

そして、レオに向かって雷撃を纏ってピカチュウが突き進んでくる。それに比例し、レオもボールを片手にピカチュウに向けて駆ける。

そして、ピカチュウのボルテッカーとレオのボールを握る拳がぶつかりあう。

ピカチュウを吸いこもうとするレオのボール。
それを拒もうとするピカチュウのボルテッカー

悲鳴を上げるスナッチマシンとピカチュウの肉体
過去にけじめをつけようとしている彼の想いをその手に込めて・・・

第二十話 「交差した道・清算した過去」

自分の過去の行いを悔いた少年は、今。心を失った者と戦っていた。ピカチュウ

自身を滅ぼさんとする電撃と、そんなピカチュウをスナッチしようとするレオのスナッチマシーン。ボルテッカー

スナッチマシーンは、ピカチュウのボルテッカーの衝撃を受け、火花を上げながら亀裂を作っていた。

「ピカチュウ……！！俺を恨んでくれて構わない！！お前をあの子の元から切り離れたのは俺なのだから！！だからこそ！俺は、お前をあの子のところに戻さなくちゃいけない！！お前をあの子の作るはずだった時間を取り戻すために！！！」

刹那。それこそ人の視力では確認できない程の一瞬。

ピカチュウのボルテッカーの威力が落ちた。

しかし、直接ぶつかり会っている彼には分かっていた。

「スナッチマシーン！フルパワー！！」

そして、ピカチュウはレオの持つボールの中にピカチュウがスナッチされた。

しかし、同時にレオのスナッチマシーンも爆発し、レオの右腕を焦がした

爆発により、数メートル飛ばされたレオ。

しかし、その手には確かにモンスターボールが握られていた
ボールの感触を確かめ、安堵の表情を浮かべるレオ。

そして、一言

「ピカチュウ・・・スナッチ完了・・・・・・・・」

そして、彼の意識は急激に遠のいていった。

そんなレオに駆けよるミレイ。意識を無くした、レオを抱きかかえ、彼の安否を確認する。

「おや？スナッチされてしまいましたか。お見事です。しかし、勝負はまだ付いていませんよ？」

彼と対峙していたレーナが、ゆっくり近づきながら意識の無いレオと、彼を抱き寄せるミレイに語りかける。

しかし、彼の耳についているイヤホンが何かを告げる。

「・・・ふむ。とどめを刺したいところですが、致し方ありませんね。」

そう言い、ミレイは踵を返し、この空間を後にした。

「助かった？」

レオを抱きかかえるミレイの口から安堵と疑惑の色の混じった声が出る。

同じ容姿の。同じ記憶。唯一違うのは無くなった右目と、心に宿し

た友への思い。

「クソオオオ……！お前と俺。何が違う！記憶も、能力も全部同じはずなのに！何が違う！！」

片膝をつき、クロノを睨みつける、偽物のクロノ。

クローン体のガレス達も、満身創痍の状態で、息も絶え絶えだった。

「何度も……言わせんな。確かに、お前は……俺と同じ姿、形してるけど……俺にはなれないんだって……。」

肩で息をするクロノが、彼にそう話す。

「なんでだ！！同じ記憶を持つてるのに、なんでお前になれないんだ！！同じクロノ・ウィールアスなのに！！」

「……私、分かった。なんで、貴方が『クロノ』になれないかが。」

怒鳴る、『彼^{クロノ}』に対して、歩きながら答えるアカネ。
振り向く、2人のクロノ。

「だって、貴方が『クロノ』なら。フエン火山であんな事は言わない。……貴方はクロノの一番、『激しい』部分を写した鏡なんだよ。」

「俺が……クロノの鏡？」

「そう。貴方はクロノの場所に自分が座ればクロノになれる、と思ってるみたいだけど、それは違う。だって、貴方の考え方と、クロ

「ノの考え方は違うもん。」

「・・・・・・・・」

無言で、下を向く彼^{クロノ}

「そう言う訳だ。分かったか？」

一呼吸入れ、そう言うクロノ。

そして、彼に近づく^{クロノ}。

そして、手を差し出す

「・・・・・・・・なんだこの手は？」

「お前は俺にはなれない。だけど、お前は俺の兄弟みたいな訳だしな。・・・・・・・・一緒に来いよ。」

「・・・・・・・・なんでだ。」

「は？」

彼の言葉に疑問の声を出すクロノ

「貴様は俺が憎く無いのか！？目を奪い！貴様になり変って、貴様の名に泥を塗った俺が！」

「アホだな、お前。なら、俺がお前に『死ね』って言えば死んでくれるのか？嫌だろ？お前だって、好きでこんな形で俺の前に来たわ

けじゃない。……それに前は俺の弟みたいなもんだしな。弟の尻拭いは兄の役目だ。」

そう言い、強引に彼の手^{クロ}を掴んで、立たせるクロノ。

「さて、名前は……。俺と交差した道・『クロス』でどうだ？」

「クロス……………」

刹那。船内を揺るが振動と爆音。

「なんだ!？」

アカネを支えるクロノ。

クロノの疑問に答えるクロス。

「多分……この船の、大量破壊兵器が打たれたんだと思う。」

「大量破壊兵器？」

「フォンスの目的は、世界の憎悪を自分に向けさせる事で、世界の『争い、憎しみ』を無くす事だ。大量破壊兵器はその、憎悪の象徴で作った物だ。」

「チツ!……クロス。向こうの二人を連れて、脱出しろ。俺はこの船を止める。そろそろ、シロナさん達が来るころだ。中と外からでこいつを止める。」

「・・・・・・・・俺を、信じていいのか？」

「弟だからな。・・・・任せたぞ。」

「・・・・・・・・分かった。」

そして、ポケモン達を戻して、奥に向かって駆けて行くクロノ。

「私も一緒に・・・・！」

クロノの後を追おうとするアカネ。しかし、その手をクロスが掴み止める。

「・・・・・・・・俺がなんとかする。アカネは、あの二人を頼む。・・・・
・・・・クロノの帰りを待って居てやってくれ。」

そう言い、アカネの代わりにクロノの後を駆けるクロス。

行き違った道が交差し、手を取り合った。

しかし、二人で歩める時間はそう長くは無かった・・・

第二十一話 「暗躍する者達・終わりへのカウントダウン」

全く揺れを感じなかった、この要塞にもようやく揺れを感じてきた。つまりそれだけの事が起きた、と言うことだ。最悪の状況を想定するクロノ。

「チツ。本気でヤバいかもな……。」

舌打ちをし、駆ける足を速める。

「坊ちゃま!!」

「セバス！無事だったか。」

廊下の交差点でセバスと合流するクロノ。

しかし、2人は足を止めることなく、そのまま奥へ駆ける。

「他のみんなは？」

「はい。旦那さまと奥様、それとギンザル様は無事に保護。のちに脱出されました。数名はをフォンスを追っております。」

そっくり、懐から発信機の信号を受信する端末を取り出し、それをクロノへと渡す。

それを見ながら、クロノは駆ける方への確信を持ち駆ける。

動力室と密接につながっている一つの部屋。

大きな筒状の機械がこの飛行要塞の下に伸び、外界へまで達していた。

しかし、その筒の末端からは、高熱を発した後に起きる湯気が出ていた。

そんな光景を、安全な部屋から見ているフォンスと2人のリーナ。

「威力は申し分ないですね。あとは・・・」

「はい。邪魔者達を消して、総帥が降伏勧告を出せば。全てが完成します。」

フォンスの発言に肯定するリーナ。
それを満足そうに見るフォンス。

「しかし、あれ以来『あのお方からの使者』が全く連絡をしてこないのが、少し不可解なのですが。まあ、良いでしょう。」

少し疑念を残す事があるが、それは微微たる事と考えるフォンス。

「では、お二人とも。legendmind達を出してください。こちらに向かっている、ジムリーダー達への迎撃も抜きなく。」

「了解」

そして、キーボードを操作し始めるリーナ達。

二つのどんぶり上下逆さまをつなげたような物体を誰も居ない、高い岩山で見る6人の人物。

「ああゝあ。あいつら何にも分かってないぜ？いいのかあのままで？」

腰を落とし、やる気なさそうに話す男性。

その男性に答える本を抱える男性

「まあ、彼らが我々の真意を理解して事をなしたとは思えませんからね。それを踏まえて、legend達の制作データに細工をして持ち出させतんですよ。いざとなれば、これで。」

そして、懐から小さな筒状のスイッチのみの着いた機械を取り出す。それを見て、小柄の女の子が笑う。

「でも、これで『彼』の実力が上がれば、良いんじゃない？ 未来の私たちのリーダー『憤怒^{レイジ}』になる人の実力がね。」

そして、その横に立つ男の子が続けて言う

「今は高見の見物だね。」

「アカネさん。今は脱出をしましょう。」

レオを担ぐクリアス。

クロノとクロスが居なくなつた廊下を見て、考えていた。

「……………ごめん。やっぱり3人だけで逃げて。」

そして、アカネは2人の後を追って走り出した。

「アカネさん!!」

そんなアカネを見送るしか出来ないクリアス。

違いすぎた平和への道。

違った道が理解しあえる時は来るのか？

第二十二話 『もう少し早ければ・・・』(前書き)

久々の更新です。

いやゝ、もう少しで、BWの発売ですね。楽しみ!!

第二十二話 『もう少し早ければ・・・』

「クロノ！上からだ！」

「頼むエンテイ！！」

上から迫りくる、偽物のライコウ。
その攻撃をエンテイが防ぐ。

しかし、眼前の廊下の先も、偽物の伝説のポケモンが立ちふさがっている。

幸い、廊下が狭いため大型のポケモン・ルギアやホウオウなどの大型なポケモンが出てこれないのが幸いな状況であるが、これまでの激戦でクロノのポケモンは戦える状況では無かった。

唯一戦えるとすれば、エンテイやラティオス。ギリギリでガレス程度である。

「レックウザ！右に回避！その後、攻撃に転じます！」

「御意！！」

レックウザの頭部に乗り、指示を出すシロナ。
立ち向かうのは、無数の伝説ポケモンの偽物達。

遙か下方。地面では、グラードンが自身の偽物と、ディアルガ、パ
ルキアの偽物と対峙している。

「この偽物風情が！本物に勝てると思うなよ！！」

強引に偽物を背負い投げをするグラードン。すかさず、手を離し、
ディアルガの頭を掴み叩きつける。

廊下をがむしゃらに駆けるアカネ。

刹那

前から、襲いかかる。

「ビレッジ！お願い！！」

咄嗟にボールからビレッジを出すアカネ。

前に立ちはだかる、偽物のスイクンやエンテイ達。

構えるビレッジも、少し足を後ろへ引く。

無理もない。いくら偽物と言っても、やはり敵は強い。

「・・・ビレッジ。全員相手にする必要はないよ。隙を見て、奥に進むよ。」

小さく耳打ちする。

それを聞き、頷くビレッジ。

そして、アカネを担ぎ、天井を使い、奥へ駆けだす。

戦うには手ごわい相手だが、逃げる分には足の速いこちらが有利。この判断は間違っていない。そう、敵が「2種類」だけならば。

壁を破り、現れるヒードラン。無論一匹や二匹の世界では無い。前と後ろにひしめき合う偽物達。

刹那

「アカネ！飛べ！！」

知っている声に従い、ビレッジは天井にも壁にも当たらないように。それこそ、この廊下の中心に浮くように飛んだ。

そして、彼らの偽物達に襲いかかる床。

まるで床に意思があるかのように、床が彼らを襲い始める。

亀裂が走り、床が裂ける。

宙に浮いているアカネには実感はないが、音がこの攻撃が何なのかを教えてくれた。
攻撃の正体は

激しい攻撃力を誇る『地震』だ。

それも単体のポケモンが発した技では無い。最低でも2体のポケモンが同時に発した技の威力だ。

全ての偽物達が消え、立ち込める煙の中から出てきたのは・・・クロノだった。

無論、本物ではない。アカネより先に行き、『クロス』と言う新し名前を得たもう一人のクロノだ。

クロスの横にはガレスとジオの二体が着き従うように半歩後ろに立つ。

「・・・何でここに来た？クリアス達と逃げると言っただけだ。」

「・・・もう、クロノを一人にさせたくない。3年前も。今回も全部クロノに背負ってもらってきた。もう、一人で何でも背負わせたくない。だから・・・」

全てを言い終わる前に、クロスがアカネに背を向ける。

「・・・俺から離れるなよ？行くぞ。」

それだけ、言うとかrossは歩き出した。

そんな、クロスの姿を見て、クロノの姿を重ねるアカネ。

似ていて当たり前。だが、今まで、クロノと戦っていた姿より、今の彼の姿の方がクロノに似ていた。

そう、容姿的な意味では無く、『心』や『雰囲気』がクロノに似てきた。

そう、思うアカネだった。

戦うグラードンとレックウザを見る6人の影。

一人の少女は、一つの小さなモニターを手に持ち、それを見ていた。モニターには、空に浮かぶ飛行要塞の内部の様子が映されていた。

「さて、そろそろいい頃でしょう。」

そう言い、モニターの電源を切り、残りのメンバーに言う。

岩肌の地面に座り込む青年が、欠伸を噛み殺し話す

「ふえ？もう良いの？」

「ええ。今の實力は分かりましたし、計画を実行に移すのにも、今回の事件のせいで、少し先送りになりますから、その間にさらにデータを集めれば良い事ですし。お願いできますか？」

「へいへえい。・・・あ、ポチつとな。」

そして、青年は懐にしまっていた、USBメモリー程の大きさの、スイッチだけが着いている物を出し、そのスイッチを押す。

「クソ！！有象無象の偽物風情が！鬱陶しい。」

クロノを背に、戦うエンティとラティオス。
ガレス達が参戦してくれば楽になるのが、今は満足に戦える状況では無いのも彼らは分かっていた。

目の前に群がる、偽物達。
が、しかし。

エンティ達が何もしないのに、目の前の偽物達は、急に悶えはじめ、その姿は粉に代わり始めて行った。
それも、一体だけの話では無い。全ての偽物たちが同じように消えて行った。

「な、なぜ急に？・・・だが、好機！」

「ああ。行くぞエンティ、ラティオス。」

そして、駆けていくクロノ達。

謎の現象によって、全ての戦力を失ったフォンス。
無論、驚きを隠せなかった。

「な、なぜです！？なぜ、legend mindが全て自壊したのですか！？設計にミスが？いいえ、設計図はあのお方のデータベースから吸い取った物のハズ。では、何で！？リーナさん！」

自分の後ろに立つ2人のリーナ。
内1人が、コンソールでデータを調べ直す。
そして、キーボードを力強く叩く。

「申し訳ありません……！！データの一部分が、書きかえられています。外部からの信号を受信すると、自壊するプログラムが仕込まれていました。……完全に私のミスです……！」

下唇を噛み、悔しがるリーナ。

しかし、そんな姿を見るフォンス。が、その目が宿していたには、怒りではなく。まるで孫を見るような、そんな目をしていた。

「そうですね……。どうやら私たちの考えは、今の世界には必要ない、と言う事ですか。もしくは、少し行動を起こすのが早すぎましたかねえ……。」

そう言い、目を閉じる。

そして、再び目を開ける。

「お二人とも。私の最後のお願いです。今すぐここから逃げなさい。」

フォンスの言葉に驚く2人のリーナ。

「何をおっしゃるのですか！？まだ我々は負けてはいません！まだ、この戦艦の主砲も有ります！それに団員も！まだ、戦えます！！」

「そうだぜ？ここで諦めたら、俺たちは何のためにこんな事をしたんだよ！」

2人の提案を首を横に振り、拒むフォンス。

「・・・mind達に仕込まれた自壊プログラム。おそらく、発信源は『彼ら』です。そうになると、我々の敵はクロノ君達だけでは無く、『彼ら』も相手にしなくてはなりません。流石に、今の戦力でそれは無理です。それに、mind達が無くなれば、伝説のポケモン達を止める手が有りません。あの方法以外は。ですから、貴方達2人には他の団員達を率いて脱出し、再起機会を待っていてほしいので。」

「・・・分かりました。」

苦虫を噛んだような顔をする2人のリーナ。苦渋の選択だった。

そして、リーナ達はここに残る団員達と、駆け足で出て行く。

誰も居なくなつたのを確認しフォンスは、キーボードを素早く操作し始める。

そして、一通りの操作を終えた後、画面にはカウントダウンが表示され、時を刻み始めた。

その、制限時間は『300秒』。約五分。

「さて、老人一人で旅に出るのはさびしいですね。・・・クロノ君にでもお付き合いを願いますか。」

そして、近くに有った椅子を引き寄せ、腰をかける。

目を閉じ、一息入れる。それを見越したように、ここと廊下をつなぐ扉が開く。

入ってきたのは、無論クロノとエンテイ、ラティオスである。

「鬼ごっこはお終いだな。・・・ポケモン保安協会の名において、お前を連行する。」

椅子に座るフォンスに対して、そう告げるクロノ。

しかし、フォンスは未だに目を閉じたままだった。

しばらくの無言ののち、ようやくフォンスが目と口を開く。

「・・・確かに今回の私の計画は、君達とこの世界に否定され、失敗しました。私の負けは認めましょう。では、最後にクロノ君。キミに聞きたい。・・・そんなに人とポケモンの関係を信じていられるのですか？」

フォンスの問いにクロノは真っ向から答えた。

「あんたの考えも理解できる。俺も、少し道を間違えたら、あんたと同じ道を歩いてたかもしれない。でも、それを踏みと度ませてくれたのは、俺の後ろに。横に。『みんな』がいてくれたからだ。だから、俺はこの全てを信じられるし、ここまでこれたんだ。」

そう言い、一歩ずつフォンスに近づくクロノ。

そして、鳴り響く警告音。

『総員退艦。クリカエス総員退艦。自爆マデ後4分。クリカエス自爆マデ後4分。……』

「……フォンス、アンタ……」

「……クロノ君。もう少し君と早く出会いたかった。そうすれば、私たちも君と歩けたと思うよ。」

フォンスの胸倉を掴むクロノ。

「そんなの、今からでも間に合う……早くこれを止める……」

「無理だよ。それに、君の大切な人も私の部下も、すでに脱出した後だ。ここ船に残っているのは我々だけだ。……では、クロノ君。こんな老人と川のほとりでも散歩に行きましょうか。」

そして、フォンスは椅子の肘かけに仕込まれた、ボタンを押す。

すると、この部屋は淡い赤い色の光に包まれる。

力の抜けて行くクロノとエンテイ、ラティオス。

この感覚には覚えがあった。

そう、テンガン山でサカキが使った・

「赤い・・・鎖・・・!!」

床に倒れるクロノ。

必死に立とうとするが力が入らない。

無論、それは椅子に座るフォンスも例外では無かった。

「・・・あの後・・・赤い鎖が・・・人体にも・・・影・・・響を
及ぼす事が・・・分かりましてね。・・・これは・・・それを・
・応用・・・した・・・物ですよ・・・。無論・・・オリ・・・ジ・
・ナルには・・・及びませんが・・・。」

苦しそうに、声を出すフォンス。

「ク・・・口ノ・・・!!」

立とうと、力をいるエンティとラティオス。

第23話 「誰のためへ」(前書き)

長らくお待たせしました。

次の話で最終話としたいです。

第23話 「誰のためへ」

シロナ達の前に立ちはだかる『legend mind』達に起きた異変。

致命傷を与えていないのに、彼らは突然その身を崩壊させた。

「なぜだか知りませんが、今が好機です。レックウザ！」

「！！これは！？」

空に浮かぶ要塞に向かうレックウザが、シロナの指示を前に要塞の手前で止まる。

「どうしましたレックウザ？」

「……これ以上近づけない。……中で『赤い鎖』の力を感じた。これ以上近づけば、我々だけでなく人も思うように動けなくなる……」

「そんな……」

浮かぶ要塞を前に唇をかむシロナ達。

床に倒れ込むクロノとエンティ、ラティオス。

「く……そ……！動け……よ！」

口より漏れるクロノの声。自分の手足なのに全く自分の思うように動かせない。

無論それは、目の前にの椅子に座っているリーナも同じ事が言えた。むしろ、クロノのより高齢ゆえに体にかかる負荷はクロノ以上だ。その影響は今のクロノでもわかるほどだった。

額に浮かぶ冷や汗。呼吸も大分荒くなっていた。しかし、その顔の笑みは絶やさなかった。

「流石に……きつ……いですね。ですが……もう終わ……りますから。」

指令室に響くアラート音がさらにけたたましく鳴り響く。

クソクソクソ……！！

終われるかよ……！俺はまだ、あいつらにちゃんと謝ってねえのに！動けよ俺の体……！！

そう強く思うが、クロノの体は微動だにも動かなかった。

「諦めないでクロノ……！」

確かに聞こえた。

クロノの耳に届いた彼のもっとも大切な人の声。

「ガ・・・・・・・・レス!!」

今出せる最大の力で、クロノは一つのボールを天井に向けて投げる。

『赤い鎖』の発生機付近でボールの中のポケモンが飛び出す。

クロノと最も苦楽を共にしたポケモン・ガレスが。

ボールから出た、ガレスの赤い鎖の力で全身の力が抜けるが、クロノの期待に応えるため、その拳に全身の力を込め振り上げる。

バリイーン

ガラスの割れる音が部屋の中に響く。

それと時を同じくして、クロノ達の体に力が戻り、ようやく立ち上がる事が出来た

「はぁ・・・・・・・・はぁ・・・・。後は、自爆装置の方を止めれば・・・・」

ふらつく足取りでコンソールに近づくクロノ。

「・・・・・・・・なぜ、そこまで人を信じられるのですか？怖くないのですか？その信じた人やポケモンが、人の生み出す欲望に食われるかもしれないですよ？」

フォンスの言葉に答えないクロノ。手はコンソールを叩く事に必死だった

「私は怖い。人の心が。そして、その心が求める平和が。キミは怖

くないのかい？」

「っせえよ。……俺だつて怖えよ。あんたと同じで俺だつて怖いよ。人の心が何時暴走するかわかんないしなあ。……でもなあ『夜』を恐れてたら何時まで経つても『朝日』なんかみれねえだろ。」

フォンスはゆっくりクロノを見た。

当のクロノは舌打ちをしながらコンソールを叩く。

止まらなかった、自爆システムが……「止まんねえのかよ。」

椅子から立ち上がり、クロノの横に立つフォンス。

「フォンス？」

「……ここに残るのは『夜明け』を恐れた老人だけで良い。『朝日』に向かって歩ける若者は先に進みなさい。」

そう言い、クロノの肩を掴みエンテイの方へ投げる。

「エンテイ。彼を頼みますよ。彼は今を生きるポケモンと。人を繋ぐ男だ。……最後に君のような若者に会えてよかった。」

「フォンス！？アンタ！」

フォンスの言葉を聞き、エンテイ達はクロノを乗せこの場を走り去った。

「待て、エンテイ！まだフォンスが残ってる！あいつも助ける！！」

「今も我々では、クロノ一人を抱えて走るので精一杯だ。……すまない。」

エンテイの言うとおり今の彼らにはクロノ一人を運ぶのがやっとだった。

事実、エンテイの背中に居るクロノを、ラティオスが上から支えながら走って、ギリギリここから脱出できるかどうかだった。

そんな2匹の半歩後ろを駆けるガレス。彼も2匹に着いていくには身一つでなければいけない。老人と言え、人一人を抱えながらでは脱出するのは不可能だった。

「くっ………そおおおお!!」

自分の無力を嘆くクロノ。

クロノと別れたセバスは、爆破装置を直接停止しようとしていた。しかし、プロテクトや回路が複雑すぎて、残されている時間での解除は不可能だった。

「ちっ・・・」

誰も居ないゆえに普段は行わない舌打ちが自然に出てしまった。そんな主人の姿に驚くサーナイトとエルレイド。この2匹はセバスの持ちポケモンである。

ここまで来るのに一々ドアを開けるのが惜しい。では簡単に開けるにはどうするべきか？簡単な事だ。壊せばいい。彼らの役目はそん

な障害物を壊す事である。

「おつと失敬。誰も居ないと思いつい昔の癖が。と、ここも危ないですね。我々も脱出しましょう。」

パートナー達に詫びを入れ、脱出の参段をする。
そんな時だった。

こんな機械だらけの部屋に来訪者が現れたそれも2人。

「ここは？」

「……要塞を動かす動力室だ。俺が知っていて、フォンスが一番居そうな場所はここだが……。」

クロスとアカネの2人だ。

「アカネ様。それと、坊ちやまの……。」

クロスを睨むように見るセバス。無理もない。自分が使える主人を傷つけ、さらには名前に泥を塗った本人なのだから。

「セバスさん！クロノは？」

「フォンスの所です。ここには私しかおりません。それより、早く脱出を。これ以上は危険です。」

「でも……」

どうしてもクロノが心配なアカネ。
そんなアカネの背を押し、セバスの方へ寄せるクロス

「クロノは俺が搜す。お前は・・・セバスと一緒に脱出しろ。」

一瞬口ごもるクロス。『セバス』と言うのに抵抗があるようだ。セバス達に背を向ける。が、セバスがそれを止める。

「お待ちなさい。・・・もしかしくとも、貴方。ご自分を犠牲になさるおつもりですね？」

セバスの問いに答えないクロス。

「そうですか。では、貴方を行かせる訳にはいきません。私と一緒に脱出していただきます。」

そう言い、クロスの肩を掴みこの部屋の入口まで歩く。そんな2人についていくアカネ。

「は、放せ！クロノを助けに・・・」

「黙らつしやい！・・・貴方も『ウィールアス家』の者ならご自身のお体の安全をお考え下さい！」

セバスの思いもよらない言葉に、驚くクロス。いや、アカネも驚いていた。

「全く。坊ちやまが2人に増えた事で、私めの老いる速さも2倍に増加してしまいます。」

「・・・俺を『家族』と言ってくれるのか？」

「事情は全て坊ちやまからお聞きしました。どうか、今はお聞き分
けを、『クロス坊ちやま』」

セバスの言葉を聞き、驚きを隠せない。

自分を『クロノの偽物』ではなく『クロスと言う一個人』として見
てくれる事に・・・

一人部屋に残り、最後の時を待っていた。自分が犯した過ちに断罪の時が来る時を・・・

「・・・・脱出しなさいと、言っただけですが？どうして戻ってきたのです？」

クロノが去った後の入口。そこには同じ顔、容姿の2人が。
リーナ達である。

「・・・・他の団員は脱出しました。あとは我々だけです、導師」

「ここでその命を消してはいけません。逃げなさい。」

「・・・・貴方のいない世界に意味はありません。貴方と見れない『夜明け』なんて僕たちには何の価値もないです。」

「しょうがない子供たちだ。好きにしなさい。」

フォンスが2人を見る目はまるで、孫を見る老人のような目だった。

少し過去の話をしよう。

2人のリーナは同じ容姿ではあるが決して双子では無い。

クローン技術で生まれた、遺伝子工学の産物であった。それも、非合法の。

ゆえに、彼らは研究所で言葉に出来ない非道な行いを平気で受けていた。無論、人だけでは無い。ここで生まれたポケモンも同様だった。

彼らは目の前でゴミのように扱われる『兄弟』を数万と見てきた。

彼らが死なずに済んだのは、『出来が良い』からだだった。他の兄弟よりは幾分ましな扱いを受けていたが、やはり『人』としては扱われていなかった。

ゆえに彼らは思った。

『いつかここを出てやる。こいつらを。人がこんな考えを起こさない世界を作る』

そう願った。

そこに来たのがフォンスだった。彼らを助け、そしてその研究所を消した。人員共々・・・

フォンスの考えと、彼らの考えは同じだった。

人の『心のゆとり』から生まれる『欲望』を消す。だから、ここまで着いてきた。

いや、それだけではない。

彼らにとって初めてだった。フォンスだけが彼れを『人』として扱

つてくれた。彼らの『家族』になつてくれた。

フォンスが彼らの手を取ろうとした時だ。

彼らもフォンスの手を取ろうと手を伸ばした。が・・・

手と手が触れる事は無かった・・・

二人の胸に風穴が開き、フォンスの顔に鮮血は着く。

何が起きたか分からない。理解できなかった。2人の手を取り、最期を遂げたかった。それだけだった。が・・・

「ハッピーエンド。はい拍手！・・・なんてつまんねえオチ誰がさせると思ってたんの？馬鹿かアンタ？組織裏切って、んなこと許されると思ってたんの？」

硝煙が漂う拳銃を回して、入口に立つ青年が話す。

「リ、リーナ！」

倒れるリーナ達を抱えるフォンス。

「そ、総帥。お逃げ・・・くださ・・・」

全てを言い終える前に、もう一度引き金を引く青年。

「黙れっつーの。っーかメンドイからもう要件済ますわ。」

そして、今度はフォンスの額に向けて銃口を向ける。

「^{スロータ}怠惰！！貴様あああああ！！！」

鬼のような顔になるフォンス。^{スロータ}だが怠惰呼ばれた青年は何の躊躇もなく引き金を引いた。

乾いた銃声と共にフォンスは床に倒れ、^{スロータ}怠惰は消えた。

「ああゝめんどくせえ。くそ、クジで外れなんて引いちまったしよ
おゝ」

まるでコンビニにお使いを頼まれた程度の独り言をしながら^{スロータ}怠惰は消えた。

「クソクソクソクソクソクソ！！！待てよコラァ！！^{スロータ}怠惰！！！！」

今ある全ての力を込め、リーナ達は叫んだ。動かなくなったフォンスの手を握り……

安全な場所まで避難したアカネやジムリーダー達。
無論、レックウザ達でもある。

だが、クロノ達だけがまだ脱出できていない。

「レックウザ。クロノ君はまだ？」

「ああ。エンティ達が空間転移が出来ればいいのだが、『赤い鎖』の力を直に受けたのだ。暫くは転移は出来ない。さらに疲労も重なって、外壁の破壊も困難。自力での脱出を待つしかない。」

全員が爆煙を上げて沈んでいく飛行要塞を見上げていた。
刹那。

けたたましい、爆音と共に爆風が全員を襲う。要塞が完全に爆発したのだ・・・。

レックウザとグラードンが壁となりみんなも守る。

そんな中、アカネの声も響く。

「クロノー!!」

こうして、この事件は幕を閉じた。以来、この事件は『オーレ地方空襲事件』と呼ばれ保安協会の教本に乗る事となった・・・。

最終話 交差する道

「ポケモン協会内部の事件後のファイル」

オーレ地方で起きた事件から早数カ月。オーレ地方はようやくの落ち着きを取り戻し、人々はいつもの生活に戻りつつある。

此度事件解決に協力してくれた、一般市民のレオ少年達も怪我などなく日々を過ごしている。

レオ少年の心の傷であった例のピカチュウは、少年の手からではなく、教会側から渡す事となった。これはレオ少年の願いであり、今後彼がスナッチマシーンを使わない、と言う決別の証らしい。こればかりは本人の心の中の事なので分かりかねる。

今回の事件で崩壊してしまったポケモン研究所は、我々とウィールアス会長によって修復された。（ただでさえ資金のやりくりが難しのにこの建物も直すとなると、しばらくはこっちの物品が不足するが仕方がない事だと思っしかない・・・）

この数カ月、『ダークポケモン』関係の事件を聞かなくなったのは、今回の事件の首謀者が黒幕と見て良いと、考える上層部が多いが、現場の意見とすれば今以上の警戒をした方がよいと思われる。嵐の前の静けさ、と言う言葉が有るようにだ・・・

「アルトマーレ新聞」

此度、全焼したポケモン協会会長・ケルア・ウィールアス氏の邸宅は豪邸とは思えないほど早く修復された。

幸いしたのか、屋敷内の従業員は全員無傷と言う奇跡ともいえる。では、当時、病院で入院していた執事姿の人物は？と言う疑問が残るが、ケルア氏は特別に我々に答えてくれた、

以下ケルア氏のコメント

・此度の我屋敷の全焼事件は、ご存知の通りオーレ地方での事件が絡んでいます。犯人は私を捕まえてポケモン協会の動きを鈍らせようとしたためです。

ですが我々はその情報をいち早くつかみ、敵の作戦を逆手に取りました。襲ってきた敵の団員数名を我屋敷の執事に見立て、ポケモン協会が管理する病院へ入院させました。こうする事で、団員を監視が出来ますから。

屋敷の全焼も敵に悟られないようにするためのカモフラージュです。ゆえに燃えたのは、中庭までで、外壁を超えては燃えていません。万が一の事を考え、近隣住民の方には避難していただいておりますが。

以上がケルア氏のコメントである。

『セバスの日記』

クロス坊ちやまが、この屋敷に来られ、早数カ月。初めはぎこちなかったクロス様だが、次第にウィールアス家に溶け込んでいかれた。そんな矢先だ。クロス坊ちやまが『屋敷を出る』と言いだしたのだ。当然旦那さまや奥様は理由をお聞きになる。

『この家の敷居をまたぐにふさわしい人間になる為に、世界を見て回りたい』と仰られた。なんととたくましい事ですか。

これに旦那さまは、一つの条件をお付けになられた。

『必ず返ってくる事』それだけだった。

そして、クロス坊ちやまは今日の朝。誰の見送りも無しに旅に出られた。

ただ、テーブルの上には『行ってきます』の文字が書かれた手紙が置かれていた。

クロノ坊ちやまと同じく、不器用な性格のようだ……。

本当に老ける速さが2倍になりそうだ……。考えるだけで胃が痛い……。

しかし、クロノ坊ちやまの安否が未だに確認されていない。

あれ以来、エンティ様やラティオス様のお姿もお見えにならない……。

無事である事を祈るしか出来ない自分が情けない・・・

初めての家族と呼べる人たちと別れ、彼は水面に浮かぶアルトマーレを背に歩いていた。

至って軽装な旅じたく。

腰には11個のモンスターボールを携え、どこに続くのか分からない道を歩いていた。いや、この旅に目的地など無かった。

歩いていると、2人の旅人が向かいから歩いてくる。

一人はおじさんと呼べるほどの中年の男性。陣羽織みたいな上着が印象的だった。

もう一人は、彼と同じくらいの背の青年だった。生憎フードをかぶっていたため顔はわからない。

話すに問題ない距離に來ると、中年の男性から話しかけてきた。

「よ！今から旅かい？若いねえ。おいっちゃんも昔はいろんなところを旅したもんよ？燃える火山！方向も分からなくなるような樹海！流水漂う北国！」

「んなところ旅してないだろ。」

中年の話に突っ込みを入れる青年。そして今度は青年が話しかけてきた。

「ま、なにはともあれ、良い旅路を。……帰る家があるんだ。何時でも帰ってこいよ」

そう言い、青年は彼の横をすぎ、アルトマーレに向けて足を運んだ。彼は青年に背中越しに声をかけた。

「教会に、夕焼け色の髪の女が居る。彼氏でも待ってるのみたいだな。有って口説いてみたらどうだ？あんならイケるかもそれないぜ？」

それを聞き、青年は「ああ」とだけ声を出し歩きつづけた。腰に12個のモンスターボールを携え。

2人の青年の道は交差^{クロス}し、別々の道を歩きだした。再び交差^{クロス}するその時まで……

ポケットモンスター――白と黒の想い・外伝――裏切りの黒――
――完結――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0479j/>

ポケットモンスター～白と黒の想い・外伝～裏切りの黒～

2011年11月16日10時55分発行